

清末小説から 114

2014.7.1

いくたびかの阿英目録 6 樽本照雄 1

《偵探外交消息奇譚》の原作 渡辺浩司 7

早期漢訳ドーデ「最後の授業」 3 胡適訳「最後一課」のばあい 神田一三 16

周作人漢訳ヨーカイ・モール 2 『匈奴奇士録』の英訳底本について 樽本照雄 28

就《申報》刊《繡像小説》廣告 與樽本照雄先生商榷 王 文君 33

王文君氏へ 『繡像小説』発行遅延問題について / 附：『繡像小説』刊行一覧 樽本照雄 37

徐兆璋日記中の近代小説與出版史料 3 完——以小説林社為中心 樂偉平選註 43

『清末民初小説目録 第 6 版』ウェブ公開中 非売品です罫 / 清末小説から 6、27、32、49

清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番4-202 樽本照雄方



いくたびかの阿英目録 6

樽 本 照 雄



翻訳小説「空谷佳人」の怪

阿英目録に収録されたひとつの翻訳小説が、あやしい。

[阿英127]空谷佳人 英 博蘭克巴勒著。林 紆訳。光緒三十三年（1907）商務印書館刊。又東方雜誌本。

阿英の説明によると、林紆訳だ。上を見てほしい。そう明記している。

商務印書館から単行本が出たことがわかる。そればかりか同翻訳は、『東方雜誌』にも掲載されたと書いてある。同じ作品だから、雑誌に掲載された時も、のちに単行本になった時も英国人原作者と訳者である林紆の名前があるだろう。そう思わせる阿英の説明だ。

私が編集している『清末民初小説目録』は、阿英目録を基礎において出発した。阿英が書いているのだから、「空谷佳人」が林訳小説であることを疑うことはなかった。ところが、該作品は、馬泰来「林紆翻譯作品全目」（1981）に収録されていない*23。なぜだろうと疑問に思ったかどうか急には思い出せない。なにしろ30年近く前のことだ。

念のためふりかえってみる。

樽目録初版（1988）では、『東方雜誌』の掲載を調べた。刊年は掲げるが、原作者、訳者は空白にしている。原作者、訳者については、上の阿英とは違うではないか。そうだったかな。

著訳者不記とする目録初版の記述が、今から考えれば正しかった。

ところが目録第2版で記述を変えた。

その主な原因は、第2版から典拠資料を明記することにしたからだ。編集方針を、阿英目録から独自のものに転換したことになる。例をあげると、阿英目録に基づいていれば、それがわかるように[阿英××]と追加した。××は頁数を示す。資料名をあげることによって研究の動向を把握することも、ある程度可能になる。以降の研究に役立つと思った。記録しておけば、あいまいさを排除することができる。この注記こそが、樽目録をほかの目録と区別する特色のひとつだ。

樽目録第2版(1997)の該当部分を見る。すると、ここから林訳小説にしている。なるほど。かすかに思い出した。すべてを点検しなおし、阿英目録の説明を取り入れてそう書き換えたのだ。阿英の記述を優先させるほどに信頼をおいていた。

以後は同じ。樽目録第5版でも、つぎのように記述した。まず、『東方雑誌』掲載から示す。

K0230 *

空谷佳人

(英)博蘭克巴勒著 林紆訳

『東方雑誌』3年8-13期 光緒32.7.25-12.25(1906.9.13-1907.2.7)

[彙 1225]著訳者不記[阿英127]期数刊年不記[大典102]創作、佚名とする[大典112][史索二122][編年160][編年171]畢[劉晚35]未題撰者[慧敏446]角書を愛情小説とする

すこしだけ説明しよう。

本来は存在しない原作の英国人名と林紆を掲げるのは、阿英目録が根拠だ。上の該当部分の記述は、不正確だといわなければならない。

前出陳鳴樹主編『二十世紀中国文学大典(1897-1929)』(1994)では創作と翻訳の2カ所に採録される。すなわち、[大典102]は創作、佚名としながら、[大典112]では(英)博蘭克巴勒著 林紆訳と書く。同じ『東方雑誌』に掲載だという。重複しているし扱いが異なる。どちらなのか。結局のところ、ちぐはぐな記載になっている。

[史索二122]は著訳者不記、期数刊年不記。説明が簡略化されているのには、理由がある。『東方雑誌』は文藝専門誌ではない、という編者の判断だと思われる。

[編年160]は署「(英)博蘭克巴勒著、林紆訳」とまるで見てきたように書いている。そういう記載がないのが問題なのだ。陳大康は、気づいていない。

[慧敏446]は『東方雑誌』掲載と単行本を1カ所にまとめる。角書を愛情小説、(英)博蘭克巴勒著、林紆訳と明記しているところに注目されたい。

こうしてみると、実態を正しく反映しているのは、著訳者を不記にする『中国近代期刊篇目彙録』[彙 1225]くらいだ。[史索二122]を加えてもいい。あとは阿英目録に従った。阿英目録にあるそのまま、林紆の翻訳だと考えている。だから、上述のような記載になったとわかる。

次は単行本だ。

K0231 *

空谷佳人

(英)博蘭克巴勒著 林紆訳

商務印書館 光緒33(1907)

[阿英127][丁未3]は三月出版とする[版補下413](小説林3期新書紹介は英博蘭克巴勒とする)[阿研509]商務³³書館、刊年不記[阿研607][劉晚281][涵訳55]原著者不記、本館著、光緒三十三年[版補下311]原著者不記、商務印書館著、光緒三十三年



『東方雑誌』掲載の「空谷佳人」

こちらも阿英目録が基礎になった記述である。林紘訳という箇所からそれがわかる。

[丁未3]は、東海覺我(徐念慈)編「丁未年小説界発行書目調査表」(『小説林』第9期 戊申年正月(1908))の3頁を意味する。「英博蘭克巴勒」および「三月」はある。だが、林紘訳はない。それを注記しなかったのは、私の過失だ。

小説林第3期新書紹介(影印本には未収録)は、英博蘭克巴勒原著として^{ママ}いる。これも林紘訳不記。

[阿研607]は、題詞2首を収録したもの。

[劉晚281]は、樽目録第3版を引き写したから上と同じく林紘訳にする。

[涵訳55]原著者不記、本館著というのは『涵芬樓新書分類総目』による。涵芬樓は、商務印書館の図書館だ。ここに林紘の名前がないことに気づいてもよかった。だが、私は阿英目録を深く信頼していた。事実と異なる阿英の説明を

け入れてくり返したのだった。

上のようにならべてみて、いまさらながら奇妙だと思う。

どこがおかしいか。説明しよう。

まず、私が信頼する目録によれば雑誌掲載に林紘の名前がない。前述のとおり樽目録初版も空白にしていた。

林紘と商務印書館の関係を考慮すれば、『東方雑誌』に発表する彼の翻訳小説に名前を落とすはずがない。商務印書館にとって林紘小説は、雑誌、単行本販売の促進拡張に大きな影響力をもっていた。

さらにいえば、阿英目録の該当作品には林紘の共訳者名が書かれていない。ここもおかしい。

研究者の大多数は、林紘が「外国語を知らない翻訳者」だと現在も批判しつつけている。阿英は、そう批判した人々のなかのひとりだった。林紘小説群について、阿英は、林紘とともに共訳者の名前をかみならずといていくくらいにあげている。林紘ひとりでは翻訳を行なうことができない。それを強調するための措置か、と思うほどだ。だが、ここだけ、なぜ共訳者がいないのか。

そういう目でみると、別の疑問が生じる。

商務版「説部叢書」の訳者は、商務印書館編訳所になっている。林紘ではない。以下のとおり(後の初集本『空谷佳人』複写の表紙と奥付を別にかかげる。付建舟『清末民初小説版本経眼録三集』(北京・中国社会科学出版社2013.8)に収録するのは、奥付一部破損、丁未年三月初版/ 年四月再版、説部叢書初集第六十三編。本稿のものは、それとは別物)。

K0232 *

空谷佳人(愛情小説)

(英)博蘭克巴勒著 商務印書館編訳所訳

中国商務印書館1907.3 説部叢書七=3 [叢書779]説部叢書第七集3[民外1046]

時報』(1912.5.14-7.2)連載も同一であるといっている。

題名の空谷は、幽谷、つまり人のこない奥深い谷間のことだ。一見すると、そこに美人がいて物語が展開する恋愛小説かと思う。「説部叢書」の角書は「愛情小説」だ。しかし、実は英国ロンドンから話ははじまる。男女の恋愛からみ、一方で10年以上の長期間にわたる少女幽閉事件が物語の柱になっている。どこにも深い谷などありはしない。内容と題名が一致しない奇妙な翻訳犯罪事件小説だ。

探偵小説は、謎めいた題名をつけることが多い。なにしろ謎の解明を主題とする種類の小説なのだ。それを理解しない中国の翻訳者が種明かしに近い翻訳題名をつけて作品をだいなしにする。「まだらの紐」を漢訳して蛇とか毒蛇とかを使用していることを指す。そればかりではないが、あることはあるのだ。

それにしても空谷とは。少女が監禁されている井戸の底から通じる地底の洞穴を、人のこない奥深い谷に喩えたのだろうか。これは好意的な解釈だ。

さて原作者に焦点をあてる。

同じ作品であるにもかかわらず、初出の『東方雑誌』では原作者が書かれていなかった。ところが単行本になると「英国博蘭克巴勒」がどこからか現われる。どういうことになっているのか。説明した文章を読んだことがない。問題は、ここに存在する。

原作者の漢訳名「博蘭克巴勒」をながめる。

どこで区切って名前か姓なのか。今までの経験から推測すれば、博蘭克が切れ目だろう。姓が巴勒だと見当をつける。推測が正しいはずもあることはあるが、だいたいはずれる。著名人ならいざしらず、知られていない欧米の小説家の名前を漢訳で示されても、わからないものはわからない。だからこそ、調べるたのしみがあるというものだ。

英国人ブランク・バリかと考えていくつかの

英文を探る。バリといっても「ピーター・パン」のバリー(Sir James Matthew Barrie, 1860-1939)ではなさそう。だいいち名前が違う。試行錯誤があるだけ。今回も時間がかかることだ。

博蘭克(ブランク)の原名候補としては、Blank、Blanck、Bolank、Bolankあたりか。あるいはPulankかも。巴勒はバレかバロか。バリーだとすればBarrie、Barry、ベイリーならばBailey、あるいはBarもある。巴を当てるのはBが多い。だが、もしかするとParleyという可能性も捨てきれない。

いまでは、それらの組み合わせを実際に検索検証することができる。著作を刊行しているかどうか。また、ひろげてそういう人物がいるかどうか。過去現在をとわず探す方法がある。こういうところは、以前と比較して研究環境が激変している。そのためにウェブが存在しているといってもいい。

商務印書館の「説部叢書」に突然出現した博蘭克巴勒は、誰なのか。同じ版元が刊行する『東方雑誌』にはなかった名前だ。単行本では英国人博蘭克巴勒として登場するその人物だ。しかし、ウェブを検索しても見つからない。いくら組み合わせをかえても、何度ためしても、当たらない。

どこがおかしい。怪しい。

くりかえし口の中で発音してみる。ブランク・バリ、ブランク・バレ、ブランク・バレー。同じく何度も自分で音にする。ブランク・バレー。そういえば琵琶湖岸から毎日眺めている西北方向に「びわ湖バレイ」というスキー場がある。バレイvalleyは、谷のこと。ここで、ウツと立ち止まる。思考が停止するような、何かがあたる感覚がある。博蘭克巴勒は、ブランク・バレイだ。これにちがいない。

なんのことはない。題名の一部である「空谷」が原材料だ。空白の谷を英語になおせばblank valleyになる。そのまま音訳して博蘭克巴勒という漢字を当てたのだろう。実在する人

名ではない。いいかげんだな。

初出の『東方雑誌』には原作者の名前がないところから、持ち込み原稿にも最初から著者名はなかったらしい。これを「説部叢書」に収録するにあたり、著者を空白にするわけにはいかない。架空の漢訳人名を提出した。普通は、でっちあげるといふ。商務印書館編訳所の編集者が考えだした解決方法だったのである。

のちに大会社になった商務印書館だ。しかし、その発展途上では、書籍刊行業務はかなり管理がゆるいものだったらしい。あの有名な翻訳小説シリーズの「説部叢書」について、編集方針がゆれていたのも証拠のひとつだ。

現在にいたるまで、商務印書館自身が「説部叢書」の成立過程について説明したことはない。現在に続く大組織にもかかわらずだ。資料は残っていないのか、と問えば、日本軍が焼き払ってしまった、という意味のことを答えてくる。日本金港堂と商務印書館の合併について、私が論文を添えて質問の手紙を送ったときのことだった。1982年、商務印書館総編室から実際にそういう手紙を私は受け取った。悪いのは、すべて日本と日本人だといふ。商務印書館にいる匿名の中国人編集者(いや、書信に公印が押してあるから総意なのだろう)は、単なる学術的質問にも政治をからめずにはいられない。実際にそういう人たちがいるのだ。個人名は明らかにせず、自分は安全地帯に身をおいて、見知らぬ日本人の私にいやがらせをしたかったものか。その効果はたしかにあった。こうして書くたびに、私は不愉快になる。そういう中国人が商務印書館にいるというのが、今でも興味深い。

ということで、樽目録第6版(2014年3月公開)には、「博蘭克巴勒は空谷 BLANK VALLEY を音訳したもの」と注記する。

阿英の誤記を正すのに、かなりの時間が必要だった。 ☐

【注】

23) 馬泰来は、林紓訳を否定している。該書目98頁においてわざわざつぎのように説明する。「已検原書、翻訳者実皆為商務印書館編訳所」

馬泰来のほか「空谷佳人」を掲げない研究書を以下にあげる。それが正しいやりにかただ。

張俊才編『林紓著訳系年』『林紓研究資料』福建人民出版社1983.6。1906年の項(436-438頁)

韓洪拳『林訳小説研究 兼論林紓自撰小説与伝奇』北京・中国社会科学出版社2005.7。1906年の項(336-337頁)

劉宏照『林紓小説翻訳研究』上海世紀出版股份公司、上海訳文出版社2011.10。1906年の項(333-334頁)

樽本照雄編

『清末民初小説目録 第6版』

Catalog of late Qing and early Republican fiction. 6th edition

ファイルは以下の2件です。

説明 pdf 5.773MB A4判 138頁

本文 pdf16.965MB A4判 4,833頁

第6版の特色

1. 清朝末期から中華民国初期までに発表された小説を中心に収録します。
2. 新聞雑誌の初出から、のちの単行本までを網羅しました。
3. 収録総数は、33,029件。その内訳は、創作24,945件、翻訳8,044件、創作と翻訳の合集40件です。
4. 各作品の履歴書になるように考えました。
5. 作品には典拠資料を明記します。
6. 翻訳作品は、判明している原作者名、原作名をかがけました。最新の研究成果にもとづいています。
7. 電字版(紙媒体での印刷はありません)ですから、全文検索ができます。
8. 私的利用の範囲内で転載、複製することは自由です。
9. 無料公開中(2014年3月公開開始)

清末小説研究会 <http://www.biwa.ne.jp/~tarumoto>

《偵探外交消息奇譚》の原作

渡辺浩司

1

《盛京時報》は、瀋陽で、清朝末期の光緒32年9月(1906年10月)に創刊し、1944年まで発行を続けた新聞である。その第93号(盛京時報館, 光緒33年正月初一=1907.2.13)、95号(“初八=1907.2.20)、96号(“初九=1907.2.21)の“雑録”欄に《偵探外交消息奇譚》なる短篇作品が連載された(盛京時報影印組の影印(1985-88年)を使用した)。現在では小説と見なされている。著者名は無く、『清末民初小説目録 第6版』(樽本照雄編, 2014年3月31日)では創作とされている(Z0581)*1。

しかし、本作は実は翻訳なのである。このたび、原作が判明したので本稿で報告する。

原作は Allen Upward 『Secret History of To-Day Being Revelations of a Diplomatic Spy』(Chapman and Hall,1904年(未見) 本稿では G. P. Putnam's Sons, 1904年を使用)中の「V. Who Really Killed King Humbert of Italy?」である(初出は、著者名 A. V. 「Underground History; The Revelations of an International Spy No. V - Who Really Killed King Humbert?」(『Pearson's Magazine』(U. S. 版)Vol. 9-No. 5 (The Pearson Publishing Company, 1903年5月)*2掲載)。

原作者 Allen Upward は、英国人で、1863年

生、1926年自殺。30以上の著作があり、詩人・作家以外に法曹としても活動していた。

本誌第96号(2010.1.1)掲載の拙稿「《外交小説世界秘史》の原作」(後に『清末民初翻訳短篇ミステリ論集』(清末小説研究会, 2010.5.1)収)で採り上げた作品も『Secret History of To-Day Being Revelations of a Diplomatic Spy』の一節が原作であった。

2

主人公は匿名の「V - 」である。彼の一人称で語られる原作のあらすじを単行本所収「V. Who Really Killed King Humbert of Italy?」に基づいて紹介する。

モーパッサンは、近代史を面白くするために無政府主義者を保護する必要がある等と私に言ったことがある。世界の支配者たちも同意見のようである。科学者や常識人は、無政府主義者を心を病んだ者と同様に扱うべきだと、支配者たちにくり返し話した。しかし、政府や警察は、無政府主義者を要注意の政治家として扱い、その結果は不幸にもよく知られている通りである。

オーストリアの Elizabeth の死後、イタリアの騎士王、Humbert は、無政府主義者をどう扱うかを協議するため、外交官と警察署長を Venice に集めて会議を開いた。私は、自分が殺人狂だと認定した者なら誰でも精神病院に監禁できるという条件と、2万ポンドで、欧米の支配者の身辺保護を引き受けていた。

私は、Humbert 王が無政府主義者の次の標的になるだろうと予測していた。しかし、彼の死が本当は無政府主義者のためではないと述べる上で、自身の予測違いを認めなければならない。

無政府主義者を調査するよう私に依頼したのは、欧州のある君主である。

私が最初にしたことは、浮浪者に近い労働者に変装することだった。というのも、勤勉な労働者は、活動派の無政府主義者の中にほとんど見られないからである。パリで塗装業の下働き

題漢中耶將蘇武 牧羊圖

天籟元年歲在己帝遣中耶奉册册... 牧羊圖 丁未元旦 會稽石龜子

偵探外交消息奇蹟 西洋著名文學家孟德山... 偵探外交消息奇蹟

奉天官廳批示 奉天官廳批示 奉天官廳批示

俄國人名實錄 俄國人名實錄 俄國人名實錄

萬國保和會 萬國保和會 萬國保和會

偵探外交消息奇蹟 (續) 偵探外交消息奇蹟 (續) 偵探外交消息奇蹟 (續)

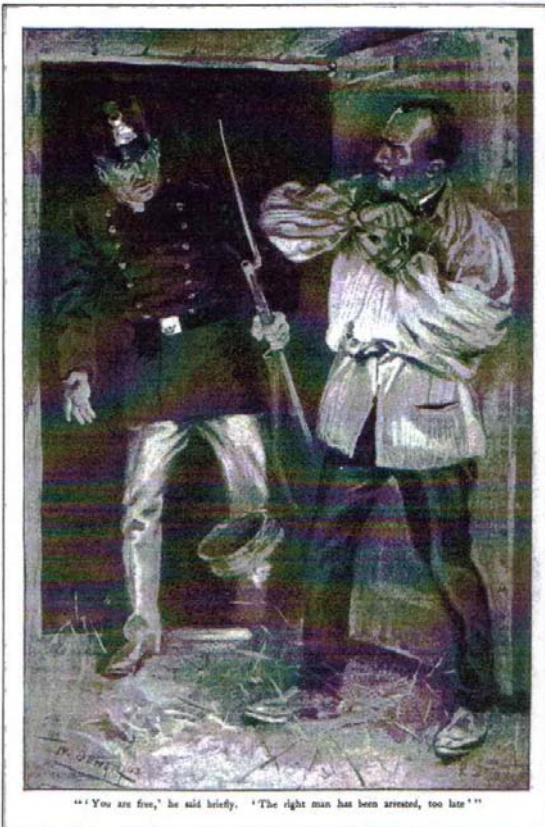


UNDERGROUND HISTORY

The Revelations of an International Spy By A. V. No. V.—WHO REALLY KILLED KING HUMBERT?

GUY DE MAUPASSANT once remarked to me that it was necessary to preserve the Anarchists in order to make modern history interesting. The rulers of the world seem to be of the same opinion. Over and over again scientists and men of common sense have told them that the Anarchist is simply a diseased mind, requiring to be dealt with like other brain-sick creatures. But statesmen and police alike have persisted in treating the Anarchist as a serious politician, with results which are, unfortunately, too well known. It is true that, after the death of Elizabeth of Austria, the chivalrous King of Italy, Humbert, summoned a conference of diplomatists and police directors at Venice to consider methods for dealing with the Anarchists. But he would have done better to call in Professor Lombroso. I myself would undertake to guarantee the life of every ruler in Europe and America for the sum of one hundred thousand dollars a year, provided I were allowed to incarcerate in an asylum every man whom I could prove to be a sufferer from homicidal mania. As it was, I forebode that the only result of King Humbert's gallant action would be to point him out to these creatures as their next victim. Yet I must now so far confess myself mistaken as to declare that the death of the late King of Italy does not really lie at the door of anarchism. It was another European sovereign, more alive to the realities of the situation than Humbert, who secretly commissioned me to make an investigation into the organization of the Anarchist sect and the trend of its

operations. I must not disclose the name of this monarch; to do so would be to point him out to the vengeance of the assassins. As soon as I had received this commission I laid aside all my other work and prepared to disappear for an indefinite period. My first step was to transform myself into a workman, or rather a loafer, for an industrious workman is seldom found among the "active" Anarchists. I secured a few jobs in Paris as a house-painter's laborer—that is to say, I did the scraping and cleaning before the skilled workman applied the fresh coats of paint. I took care to show no zeal in my employment, and in the intervals of work I hung about the brasseries and grumbled at the smallness of my earnings. By these tactics I quickly earned the reputation of a good comrade, and a true-hearted Republican. The Socialists of the quarter I had chosen to work in quickly recognized me as a lively convert, and I allowed them to enrol me in one of the most advanced societies. Here I had to be very careful to show no signs of superior intelligence or will-power. These people are frightfully jealous of all forms of ability, and unless I had carefully kept up the appearance of silliness and stupidity I should have been hounded out of their ranks. As it was they saw in me simply a useful instrument. All these measures were mere preliminaries to the final one of blossoming forth as a declared Anarchist. It is from the ranks of Socialism that Anarchism draws its recruits. Though the two theories are utterly opposed, they express the same dis-



"You are five," he said briefly. "The right man has been arrested, too late."

Copyright, 1902, by C. Arthur Pearson, Ltd., in the United States of America.

として働いた。仕事を熱心にしないうように気をつけ、仕事の合い間には食堂で賃金の少なさに不平を言うようにした。

そうすることで、私はその地区の社会主義者から有望な転向者として見られるようになり、そこでその最も先進的な団体に会員にしてくれるよう頼んだ。無政府主義が新会員を選ぶのは、一般人の社会主義者からだった。両者の理論は全く異なるのに、文明に対して同じ不満を口にしていた。無政府主義者は、おかしくなった社会主義者の一段階上の者だった。

パリは無政府主義の拠点ではなかった。拠点として知られていたのは、チューリッヒ、ロンドン、アメリカのジャージー・シティだった。チューリッヒは、ロシアの拠点で、無政府主義のというより虚無主義の拠点だった。故に、彼らの指導者と接触できるのを期待して、ロンドンへ渡ることにした。パリの仲間からの紹介もあり、ロンドンでは疑われずに社会主義からの有望な転向者として受け入れられた。ロンドンの無政府主義は内部分裂しており、各国の君主を打倒する計画を練る時間は無いようだった。私が求められたのは、某皇太子の暗殺だった。私は君主を倒したいと言い、従わなかった。

その結果、私が暗殺目標となった。2日後、私を気に入ってくれていた機関紙の編集者が夜明け前に私の所を訪れ、理由を告げず、ジャージー・シティの人間に紹介するからアメリカへ渡るよう迫った。その1時間後、私はいつも通り仕事探しに出かけた。すぐに尾行に気付いたが、そのままにしておいた。夜、テムズ河畔へ行った。火器の使用は評判を落とすし、尾行はステッキを持っていなかった、ナイフを使うのだろうと思った。鎖かたびらを着用しており、私を刺すのは簡単ではないと思いつつ、背後から足音が近づいた時は、心臓の鼓動が速くなった。尾行の男を見ると、20歳に届かないような若者で、顔面蒼白、手足が震えていた。彼はわざと私に気付かれるようにし、暗殺失敗の

言い訳にしようとしていることがわかったので、私は無言で彼のそばを通り過ぎ、尾行をまいて、リバプールへと行った。

アメリカに到着し、ジャージー・シティで、編集者が紹介してくれた Ferreti というイタリア人に会った。私は歓迎され、最も勢力のある無政府主義団体の会員になった。その間、私は Lebran と名乗り、Paterson から来た Bresci という長髪の男とドミノで遊んでいた。間もなく、君主暗殺を主張していたことが知れて、皆から敬意を持って扱われるようになり、Ferreti は Humbert 王への刺客として私を賛美し始めた。彼はしきりに Humbert 王暗殺の必要性を力説した。私はこっそりニューヨークへ行き、パリの秘書に暗号で電報を打ち、Humbert 王へ警戒するよう伝えさせた。しかし、王は警告に耳を貸さなかった。そのうち、Ferreti 以外の者も私を教唆し始めたので、裏に何かあるのではと疑い始め、反駁を試みることにした。夜遅く、Ferreti、「The Bear」と自称するイタリア人、ドイツ人の Peters、スイスの時計職人の4人がいた。皆が Humbert 王暗殺を主張した時、私は他の君主の名を挙げ、Humbert 王を暗殺するのは不合理だと反論した。4人は Humbert 王暗殺に執着するので、私は何か別の理由があることを確信し、「私は誰の命令も受けない」等と言ってその場を去った。私はまた警告の電報を打ったが、また無視された。Ferreti は私を信用していたようで、翌日、彼から呼び出された。そこで、彼は Humbert 王を暗殺すれば資金が提供されることを打ち明けた。私は更に詳細を尋ねた。彼は言葉を濁して、これ以上は他と相談する必要があるが、決して個人的な殺人依頼ではない等と言った。私は「命を犠牲にする仕事で、知らない誰かの手先になれない、なぜ私を信じて理由を教えてくれないのか」等と話した。彼は動揺し、同志に伝える等と答えた。数日間、その件の話は無く、逆にスイスの時計職人から、私が挙げた他の君主について1人に絞

るよう勤められた。私は「陰謀の手掛りが絶えた、貴方の命の保障はできない」等と王に電報を打った。だが、今回も無視された。

彼らの計画を遅らせようと考え、ひそかに別名でもう1間部屋を借りた。私は変装し、彼らの尾行を始めた。そして、この団体の指導者はスイスの時計職人だという結論に至った。私は物乞いをしながら、近辺を探った。数日は動きが無かったが、これまでの土曜の夜の集会で彼がいつも欠席していたのを思い出し、週末には何かわかるのではと期待した。夜10時、背の高い、浅黒い男が私の横を通り、時計職人の店に入り、すぐに時計職人がシャッターを閉めようとした。すばやく行動し、彼に話しかけた。彼は驚き、「警察の人間だと思った」等と話した。私は「反対で、警察に追われているので変装していた、話をしたいので入れてほしい」等と言った。思った通り、彼は客がいるからと拒んだ。私は「客が去るまで待つ」等と言い、無理に入った。客は警戒して立ち上がろうとした。店内の薄明かりの中、その客が黒人だとわかった。時計職人は私の説明をあまり信じていないだろうし、私はこの客がどう関係しているのかわからなかった。客は私の侵入にとっても困惑しており、状況は複雑だった。私はイタリア語で時計職人に客のことを尋ねた。彼が答える前に、客は地中海東部の船乗りが使うイタリア語で彼に「こちらが仕事を引き受けるよう説得していた人ですか」等と尋ねた。彼は追い詰められ、客に中で話そうと言い、私にも説明すると言った。私は客にもわかるような易しいイタリア語で「君に正義のためと依頼された危険な仕事をするつもりだ、だがまず誰が資金を提供してくれるのか知りたい、それが公平だと思う」等と彼に話した。客が「なぜ話していないのか」等と尋ねると、彼は「私には彼が信用できるかわからないからだ」と答えた。私は「私の方こそ君が信用できるのかわからない、君はこの件で大金を手に入れるのに、私には何も知らせないの

か」等と反論した。彼は絶望したようだった。私は客に「貴方が誰なのか、なぜこの仕事を実行したいのか教えて下さい、そうすれば引き受けましょう。お金についてはこの同志に渡して下さい、金額だけ教えて下さい」等と言った。時計職人は落ち着きを取り戻し、店の奥で話すことを申し出た。彼は「この人はエチオピア人(Abyssinian)で、Menelik 皇帝のために来た」等と話し、私は驚いて理由を尋ねた。彼は「Humbert 王がイタリア-エチオピア戦争(Abyssinian War)の首謀者だということは新聞の通りだ。王は和睦したが、Menelik は、王が英国と結んで再び攻めて来ると考えている。エチオピアはイタリア勢力を国内から一掃したいと思っているが、王が存命の間はそうはできないと考えている」等と言い、客に同意を求めた。客は真っ白な歯を見せ微笑で答えた。客は「エチオピア人が彼を暗殺しようとしても、止められるだろう。だからヨーロッパ人によって暗殺されるべきなのだ。皇帝は私を派遣し、私はイタリアやフランスに行き、すべての君主を抹殺すべきだと教えている、君たちの主義の信奉者に依頼するのが一番だと学んだ。そこで君たちの主義の本部があるこの地に来た。君たちの誰かがこの仕事を引き受ければ、すぐに1千ドル払うし、Humbert 王の死を聞いた日には4千ドル払う。どう分けるかは私は関知しない」等と話した。アジアやアフリカでは暗殺も一つの政治手段だと知ってはいたが、半文明国の皇帝と欧州の過激な革命主義者の、この前例の無い同盟には全く衝撃を受けた。私の立場はとても難しいものとなった。断れば、客は次の刺客を探すであろうし、客を警察に告発しても、警察は客に買収されるだろうし、アメリカと無関係な政治犯を罰する裁判所は無いであろう。私は形式上、仕事を引き受けた。次の土曜、エチオピア人は一度目のお金を払い、我々はそれを分けた。その翌日、私はこれまでの状況を電報で送り、イタリア政府にこのエチオピア人を極秘に拘束し本国へ送還する

権限と資金を求めた。しかし政府はワシントンの公使に、エチオピア人の逮捕と追放を要求するよう命じるという愚行を演じた。結果として、ジャージー・シティのイタリア人地区に質の悪い警官が押し寄せ、賄賂が動き、私は疑われないようにするため、急いで欧州へ出発せざるを得なくなった。

出発の前の晩、頭の鈍い Bresci が現れ、一緒に行きたいと言った。私は「お前は向いていない、すぐに露見するだろう」等と断ったが、彼を過小評価していた。出航前に出発する旨の電報を打ち、「Humbert 王を殺害する」等と加えた。この軽侮の文句に発奮したのか、フランスに着くとローマから派遣された警官がいた。私は彼を宿へ連れて行き相談した。彼が「貴方の行動中は、彼らは他の刺客を送らないでしょう」等と言ったので、「時計職人は私を信用しているわけではないので、そうとは限らない」と答え、「私が空砲で王を狙う、君たちが阻止できれば、王は無事で済むと思う」等と話した。彼は国境で私を止めると言ったが、1週間後、私はローマにいた。私自身が警察を刺激することにより、真の刺客に対する効果的な警護をとるよう期待したのである。私はエチオピア人を監視するよう、昔の雇い主の Pinkerton's に依頼した。エチオピア人は暗殺成功が保証されるまではニューヨークを離れないと考えたからである。王の、危険に対する軽視と監視に対する嫌悪のため、イタリア警察は苦勞して警護していた。変装が露見しないまま、私は王の後を追い北部へ行った。Turin の駅で、何かに憑かれたような表情をした Bresci を見かけた。尾行しようとしたが見失ったので、現地の警察署長に知らせた。警官たちが市内を搜索したが見つからなかった。翌朝、Pinkerton's から、エチオピア人がリバプールへの乗船券を手配したとの電報を受け取った。私は絶望的な状況だと思い、警察署に急行し「24時間以内に Bresci を逮捕しないと王の命が危険だ」等と伝えた。そして、

王に面会して警告しようと Monza に向かった。午後に Monza に着くと、なんと私が逮捕されてしまった。何を言っても無駄で、監獄に入れられた。イタリア警察の友人やパリの秘書に電報を打った。獄中で私がいても立ってもいない時、突然、外で騒ぎが起こったようだった。私は不安でドアをたたいた。ドアが開き、武装した看守が私に「真犯人が捕まった - 遅すぎたが」等と言った。私は沈み込み、大泣きした。

Humbert 王は、Umberto とも表記されるウンベルト 1 世(1844年生)のことで、実際に、1900年7月29日、イタリア系アメリカ人の無政府主義者、Gaetano Bresci により、Monza で暗殺された。オーストリアの Elizabeth は、Elisabeth とも表記される皇后エリーザベト(エリザベト、1837年生)のことで、1898年9月10日、イタリア人の無政府主義者、Luigi Luccheni により、ジュネーヴで暗殺された。Menelik 皇帝は、Menilek とも表記されるメネリク 2 世(1844年生、1913年没)のことで、1895-96年のイタリア-エチオピア戦争で勝利し、エチオピアの独立を維持した。

史実に、巧みに虚構を取り入れ、面白い物語にしている。

3

翻訳について述べる。まず、中国語訳が拠ったのは、雑誌か単行本かが問題となるが、両者の相違個所について、翻訳は単行本に一致する(例：君主の身辺保護の代金を、雑誌-one hundred thousand dollars(478頁左)、単行本-£ 20,000(121頁)、中国語訳-二萬磅(連載1)とする)。故に、中国語訳は単行本に基づくものとし、以下の引用はすべて単行本からである。

他に訳されていた場合の原作探求の手掛りになると思うので、主な固有名詞の対照表を掲げる。

| | |
|---------|---------------|
| 原作 | 中国語訳 |
| Humbert | 恒勃爾特(恒勃爾德) |
| Ferreti | 費列篤(費烈篤, 費爾篤) |
| Bresci | 普烈士(普列士) |
| Menelik | 梅聶利克 |
| Jersey | 諾爾士 |

書名について、原作「Who Really Killed King Humbert of Italy?」(誰が本当にイタリアのHumbert 王を殺害したのか?)を、中国語訳“偵探外交消息奇譚”(探偵外交情報奇談)としている。短い字数での直訳は難しいので、内容の全体を漠然と表す書名にしたのだろう。連載第1回(93号)末には原著についての紹介がある。以下に挙げる。

法國巴黎府有某君，上年著一書，名曰：外交秘密。書中所載無非歐美外交秘密消息，一時驚動各國外交界記者。所譯者實其一節也。庶幾閱報諸公得因此而知各國外交手段之一端乎。

(フランス・パリの某君が昨年、《外交秘密》なる書物を著した。内容はすべて欧米の外交秘密情報で、すぐに各国の外交関係の記者を驚かせた。ここに訳したのはその一節である。本紙読者におかれては、一読の上、各国の外交手段の一端を知っていたきたい。)

Allen Upward を“某君”とし、フランス人のように扱っている。前掲拙稿「《外交小説 世界秘史》の原作」でもアメリカ人と誤解されており、なぜかぞんざいに扱われている。

内容については、省略が非常に多いことが言える。省略に伴い、前後をつなげるための改訳・加筆も見られる。誤りについては、「Zürich」(122頁)を“俄國蘇里齊”(ロシア・蘇里齊, 連載1)としたり、「a Swiss watchmaker」(128頁)を“一自稱鐘表工人之瑞典人”(一人は時計職人と自

称するスウェーデン人, 連載1)としたり、散見される。

省略と改訳の個所を挙げる。主人公がロンドンに來た直後の場面である。

In London I found myself received without the least suspicion. My carefully prepared record stood me in good stead. I was introduced by my Parisian comrades as a promising convert from Socialism, and no one inquired further.

I found the London Anarchists torn by internal dissensions which left them no time to think of attacking kings and queens. The first man I was asked to murder was Prince , the leader of the idealist group, whose sole offence was his refusal to concur in the homicidal programme of the active Anarchists.

I refused to execute this mandate, on the plea that I had vowed to put to death a crowned head, and could not afford to risk my life in the pursuit of humbler prey.

I may state here that the elaborate machinery of secret meetings, oaths, ballots, and so on has no existence except in the imagination of popular novelists. Their fantastic descriptions can only provoke a smile on the part of any one who has been behind the scenes of Anarchism.

The Anarchists are a fluctuating community, here to-day and gone to-morrow, among whom a few leading spirits who have learned to know and trust each other by actual experience exercise an influence much like that exercised by the Front Bench over a Parliamentary party in England, an influence which varies with their own concord and strength of character.

When these leaders find a man whom they

see to be a suitable instrument, they bring their influence to bear on him to carry out whatever object they may agree upon. In some cases perhaps a pantomimic scene is arranged, such as we read of in romances, to impress a weak mind. I can only say that I never saw anything of the sort.

A well-known Anarchist, whose name would be recognised immediately were I to mention it, took me aside one night, and suggested to me the removal of the Prince. I gave the answer I have mentioned, and the proposal was instantly dropped.

My refusal was followed, naturally enough, by an attempt on my own life. Two days afterwards the editor of an Anarchist paper, who had taken rather a fancy to me, came round to my lodgings before daybreak and advised me to leave for America. He gave me no reason for this advice, but he was very urgent with me, and insisted on writing me a letter of introduction to a man living in Jersey City. I promised to consider the matter, and he bade me farewell.

On leaving my lodging an hour later to go and look for a job - the customary pretence - I discovered immediately that I was being followed. I need scarcely say that for me to baffle the clumsy espionage of such blunderers would have been the easiest thing in the world. But I wished to see how far they would go, and I allowed my tracker to follow me all day. At night I went down to the Thames Embankment. I placed myself on the edge of the river steps by Cleopatra's Needle, and waited.(123-125頁)

(ロンドンでは全く疑われずに受け入れられた。注意深く準備した経歴が大いに役立った。私はパリの同志により、社会主義が

らの前途有望な転向者として紹介され、誰もそれ以上質問しなかった。

ロンドンの無政府主義者たちは不和で内部分裂しており、そのため君主を攻撃する計画を立てる時間など無かった。私が暗殺を命令された最初の標的は皇太子の で、彼は理想主義グループのリーダーだった、そして彼の唯一の違反は、活動派の無政府主義者による暗殺計画への協力を拒否したことだった。

私は、君主の暗殺を誓ったのであり、小物の追求に命をかける余裕は無いとして、その命令を断った。

秘密裏の会合・宣誓・投票等をする、苦心の上に設立した組織というものは、人気作家の空想の中にしか存在しないことをここに述べておこう。彼らの空想的な記述には、無政府主義の現場に潜む一部の者たちは笑うことしかできない。

無政府主義者たちは変動する共同体で、全く一時的なものであり、実体験によって知り合い信頼し合った数名のリーダーたちの間のものである、彼らは、英国で下院の最前列に位置する者たちが議会政党を超えて影響を及ぼすように、意見の一致と個性の強さで変化する影響力を行使するのである。

彼らが手先として適任だと考えた人間を見つけると、協議の上で決定した目的すべてを実行しようその人間に迫っていく。ある場合では、ロマンス小説に見られるように、その人間の弱い心に印象づけるような無言劇のような場面が準備されているらしい。ただ私はそのようなものは一切見たことはなかった。

有名な無政府主義者、その名は私が触れるとすぐに思い出されるだろう、彼がある晩、私を脇に連れ出し、皇太子の暗殺を提案した。私は上に述べたように答え、その

話はすぐに終わった。

私の拒否により、当然のように、私が狙われることになった。2日後、無政府主義機関紙の編集者、私のことを気に入っていた、彼が夜明け前に私の下宿に現れ、アメリカへ行くよう忠告した。彼はその理由を語らなかったが、しきりに催促し、ジャージー・シティにいる男への紹介状を書くと言った。私は考えておくと約束し、彼は別れの挨拶をして去った。

1時間後、いつもの見せかけで、仕事を探しに出かけた所、すぐに尾行されているのに気付いた。そんな下手な偵察の裏をかくことくらい私にとって至極簡単なことはいふまでもない。しかし、私は彼らがどこまでやるのか見たいので、一日中、尾行させておいた。夜、私はテムズ河畔に行った。「クレオパトラの針」のそばの階段の端に立ち、待った。)

適値該黨開總會、集議刺斃某親王事之時、余亦預議、放慷慨激越之言、以驚動各黨員、從此而後、彼等大信、不以入黨日淺之故、白眼待余、自謂天哉、我事已成矣、夫所謂無政府黨者、運動敏捷、宛如波濤、今日在此、則明日在彼、出沒隱顯、不可端倪、蓋此黨有一領袖、率其黨員、如手足之相輔其有權勢、衆皆俯首听命、一經受命、不論有何理由、必須恪守其命、故領袖、時向胆小行怯者、命以至難且危之事、見其狼狽畏懼之狀、而自以爲樂矣、夫領袖以余爲怯懦與否、吾未之知、但入黨之後、未經旬日、即命余速赴美國諾爾士、不知有何目的、但交余以介紹文憑而已、次日余結束首途、知有人尾余而來、疑是政府之偵探、而余亦不懼、漠如不見、行至鐵穆士河畔、停立於克列窩巴特拉紀念塔前、時正黃昏、行人絕跡、四顧寂寥、(連載1、読点は原文のまま、以下同)

(ちょうどその党は総会を開いていた。某親王暗殺について議論していた時、私も参加し、意気盛んで激しい意見を述べた。そのため各党员が驚き、これ以後、彼らは私を大いに信頼し、入党後、日が浅いために軽視されるということはなかった。ああ、うまくいったと思った。

そもそも無政府党は動きがすばやく、まるで波のように、今日こちらにいれば、明日はあちらにいるという調子で、その出沒は予測できない。この党には指導者が一人おり、党员を率い、手足が助け合うようにその権勢を保っている。彼らは服従し命令を聞く。一度命令を受けると、どんな理由があろうと、必ず従わなくてはならない。故に指導者は、時々臆病な人間に困難で危険な命令を与え、そのうろたえる様子を見て、一人楽しむのである。指導者が私を臆病者と見たかどうかは知らないが、入党から10日経ずして、私はアメリカ・ノル士に行くよう命令された。何の目的かは知らないが、ただ紹介状を渡された。翌日、出発の準備をしていると、誰かに尾行されているのに気付いた。政府の捜査員かとも思ったが、私は怖くもなく、気付かないふりをしてそのままにしておいた。鐵穆士河畔に行き、「克列窩巴特拉紀念塔」の前で立ち止まった。黄昏時で、歩く人はおらず、辺りはひっそりとしていた。)

上述のように、原作の皇太子暗殺依頼のくだりがすべて省略され、その前後をつなぐために、指導者がノル士行きを命じたことにしており、ひどい改訳である。

もう1か所、最後の部分を挙げる。

Suddenly, as I tramped impatiently up and down within my narrow bounds, I was aware of a terrible commotion outside. Men ran

past the door of my prison, curses and cries were heard, and there was a sound of bayonets being fixed. Maddened by the nervous tension, I battered with my manacled hands against the cell door.

It was flung open from without, and an armed warder faced me.

' You are free, ' he said briefly. ' The right man has been arrested - too late. '

I sank down on the plank seat and burst into tears. (144-145頁)

(私が狭い所でいらいらしながら足音を立てて行き来していると、突然、外でひどい騒ぎが起こったのに気付いた。男たちが監獄のドアの前を走り過ぎ、罵声と叫び声が聞こえ、銃剣を取り付ける音がした。私は不安で逆上し、手錠をされた両手でドアを激しくたたいた。

外から乱暴にドアが開けられ、武装した看守が私の前に立った。

「お前は自由だ」彼は短く言った。「真犯人が逮捕された - 遅すぎたが。」

私は板張りの床に倒れ込み、涙が一気にあふれ出た。)

數点鐘之後、聞房外足音亂起、喧騒異常、一葉散而知天下之秋、余聞此騷擾、知必有凶變、須臾有人開戶、曰、「兇犯已獲、爾可釋行矣」

余聞之乃大喜、謂凶犯已獲、加以嚴刑、自無不傾吐種切、孰意普列士先爲下手、竟斃恒勃爾特皇帝也、嗚呼、以予外臣、螻蟻之命、萬死不足惜、特一片苦心、如湯澆雪、化爲烏有、回憶以前種々所歷、皆在予意料之中、而竟不能如予所期、雖以至酷無加之刑、施之普列士、而已無救于義皇之死也、而今尚後、萬事皆休、予心如死灰之不可然矣、聊撮敘之、願告天下之抱苦心而不得慰、與予同出一轍者、爲之同聲一笑也(連載3)

(数時間後、室外でドタバタする足音が起こり、大変な騒ぎになった。葉が1枚散っただけで秋が来たのを知るかのように、私はこの騒ぎを聞いて、恐ろしい変事が起こったに違いないと悟った。間もなく誰かがドアを開け、言った「犯人はすでに捕まった、お前は釈放だ。」

私は聞いて大いに喜んだ。犯人が捕まったからには、厳しい刑が下されるだろう。ここで心中を吐露すると、普列士が先んじて恒勃爾特皇帝を暗殺するとは誰が考えたであろうか。ああ、私の取るに足りない命など失っても惜しくないが、ただこれまでの苦心が、湯を雪にかけたように無に帰してしまった。これまで経てきたことを思い返すと、すべて私の考え通りだった。しかし、結局、その先は思い通りに進めなかった。普列士には極刑が待っているが、イタリア皇帝を死から救うことはもうできない。これですべてが終わり、私の心は灰のように燃え尽きた。ここにそのいきさつを述べた。世間にて苦心するばかりで安心できない、私と同じ境遇の者に、これを読んで一緒に笑ってくれるよう伝えたい。)

原作の、看守の台詞で、最後に短く付け加える「too late」だけで、すべてを説明する描写がすばらしいのに、中国語訳は御託を並べて台無しにしている。また、内容も原作の意図とは異なると思うので、理解に苦しむ加筆・改訳である。

4

現在に通じる意味での“外交”という言葉が恐らく一般に浸透しつつあった晩清期に、それを書名に含む本作が、同じ晩清期に技術発展等のおかげで出現した“報”(新聞)で読まれるとは、当時における時代の変化を確かに感じさせる。そんな1世紀以上前の時代の変化を示す作品の正体を明らかにし、翻訳水準を示した本稿

は、一定の意味があると思う。



【注】

- 1) 本作の冒頭部分を引用する中村忠行「清末探偵小説史稿(三・完) 翻訳を中心として」(『清末小説研究』第4号(1980.12.1)掲載)も「国際スパイ小説」とは述べるが、翻訳とは述べていない(63-64頁)。なお、張永芳ほか主編《《盛京時報》近代小説叙録》(瀋陽出版社, 2010.8)には採録されていない。
- 2) HathiTrust Digital Library での公開版を使用した。

【参考文献・ホームページ(HP)】

Jennifer Baise 編 『Twentieth-Century Literary Criticism』
Volume85, Gale Research, 1999年

Hal May 編 『Contemporary Authors』 Volume117, Gale
Research Company, 1986年

Mary A. O'Toole 執筆「Allen Upward」 - Thomas F.
Staley 編 『British Novelists, 1890-1929 ;
Modernists』 (Dictionary of Literary Biography
Volume36)Gale Research Company, 1985年

Scot Peacock(Managing Editor) 『Contemporary
Authors』 Volume187, Gale Group, Inc., 2000年

張永芳, 王金城, 馮濤主編「《盛京時報》近代小説簡
目」『清末小説』第32号, 清末小説研究会, 2009年
12月1日

張永芳, 王金城, 馮濤主編《《盛京時報》近代小説叙
録》瀋陽出版社, 2010年8月

中村忠行「清末探偵小説史稿(三・完) 翻訳を中心
として」『清末小説研究』第4号, 清末小説研
究会, 1980年12月1日

William G. Contento 編「The FictionMags Index」
<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2014
年4月10日確認)

HathiTrust Digital Library
<http://www.hathitrust.org/home> (2014年4月10日確
認)

早期漢訳ドーデ「最後の授業」3

胡適訳「最後一課」のばあい

神田 一三

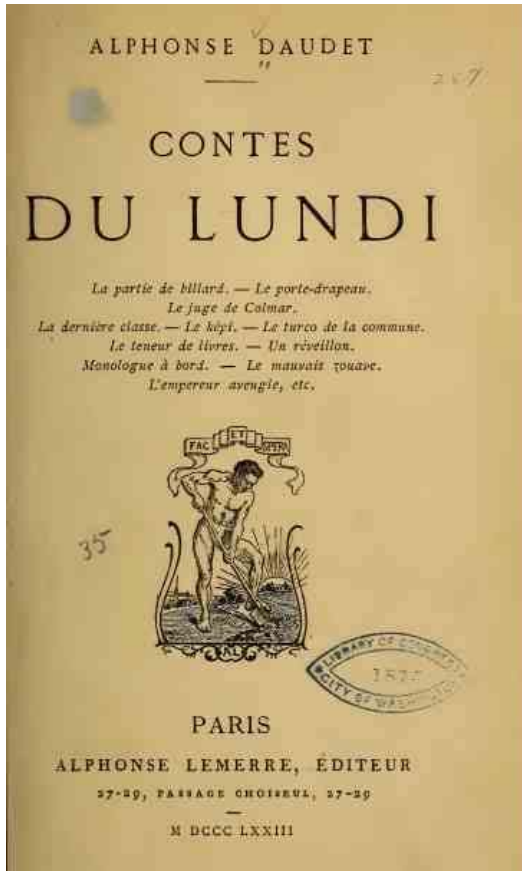
渡辺浩司氏からのご指摘

前号までの記述について、渡辺浩司氏より以下のようなご指摘をいただいた。

第112号(2014.1.1)の「早期漢訳ドーデ「最後の授業」1」で、フランス語原本として、23頁右上にある書影(Nelson版)は、私がインターネット上「INTERNET ARCHIVE」ホームページで見た限り、1873年版ではなく、[1916年]版でした。([]を付けたのは、刊行年を見出せなかったからです。但し、扉頁(23頁右上書影)の次頁に、「ALPHONSE DAUDET ... mort en 1897 ... PRINTED IN GREAT BRITAIN」とあり、また、巻末の出版広告の中に、「BENTLEY, E. C. L'Affaire Manderson」とあり、これは BENTLEY の『Trent's Last Case』1913年のフランス語訳です。ですので、1913年以降に刊行されたと推測でき、1873年版とは考えられません。)

同ホームページには、1873年版も公開されていますが、『La Dernière classe』の掲載順が Nelson[1916年]版と異なっています。

本誌第115号は本年10月1日公開予定です



フランス語1873年初版の扉

更に、第113号(2014.4.1)の「早期漢訳ドーデ「最後の授業」2」の32頁右で言及された「注」が、1873年版にはありません。

渡辺氏のご指摘のとおりだ。ご教示に感謝します。あらためて初版の扉をかかげる。また、ミストラルの「鎖から解き放つ鍵」についての注は、初版には存在しないことも確認した。少なくとも1876年以後の版に掲載がある。追加したらしい。それ以外は本文同一。以前に引用したフランス語原文の頁数はそのままにし、()内に初版の数字を挿入することにした(ただし、再度の掲載はないだろう)。

ドーデ「最後の授業」の問題点

作品を成立させている前提からして奇妙だ。

ドーデが作中くりかえしていることがある。フランス領アルザス地方においては、フランス語が主要使用言語、あるいは母語である。あたかもそうであるかのように読者に思わせようと努力している。フランツたちがフランス人だと誤解するように誘導する。

プロシアに負けて、それまで使用されていたフランス語が使用禁止になる。祖国が失われ母語が奪われる。その恐怖を書いている。フランス語教師の職を失い祖国に帰国しなければならないアメル先生に対して、フランツ少年に「気の毒な人」「かわいそう」と言わせる。

しかし、アルザス地方で主として話されているのはフランス語ではない。ドイツ系アルザス方言である(蓮實重彦231頁)。

フランツ少年は、フランス語を話すことができず読み書きができない。だからこそアメル先生からフランス語の授業を受けている。その先生は、当然フランス語で授業をしているだろう。

「フランス人だといいながら、フランス語が話せないではないか」という台詞が象徴的だ。

フランス語が母語であれば、話せないはずがない。フランツ少年がフランス語を話すことができないのは、母語ではないからだ。田中克彦(126頁)以来、多くの指摘がある。フランス人であることすら怪しい。少なくともフランツ少年はフランス人ではない、とすればすっきりする。すっきりするものにも、フランツ(Frantz)という名前そのものがドイツ語だ。フランス語ならばフランソア(François)になる。

ドーデの作品を注意深く読めば、その矛盾が露わになっていることは明らかだ。

「最後の授業」の致命的な欠陥は、母語(このばあいはフランス語)をしゃべることのできないアルザス人フランツ少年たちを設定したことだ。母語を知らない人たちに母語を教えるために教師がやってくる。話すことのできない母語は、母語ではない。その矛盾により、小説の

構成それ自体が成立しない。

普通ならば、成立しない小説は、そのまま廃れてしまったはずだ。

だが、ドーデは、そこを取り繕い別の主題を前面に押し出した。その背景には、中本真生子というところの「一丸となってドイツに抵抗し、フランスを愛し続けるアルザス」という一種の神話^{*14}がある。ドーデは、具体的な事実を無視して枠組みだけを抽出する。すなわち、戦争に敗れて土地が割譲され自分たちが使用していた言語が強制的に変更される。「母語が奪われる」そう拡大解釈して提示した。別の形に読みかえたといってもいい。これに「祖国愛」を結びつけた。

ドーデ流「母語が奪われる + 祖国愛」は、作品をはなれてひとり歩きをしはじめる。世界中をかけまわるほどの強靱さを保った。

作品の欠陥を隠してしまうほどにドーデの作文が巧妙だということができるだろう。あるいは、翻訳者、読者の側には、祖国愛、愛国心を歌い上げた名作だという先入観がある。はじめからその方向で作品を読む。広く長く読みつがれた理由だ。

冷静に見れば、わかるはずだった。あとからそう書くのは簡単だ。なるほど、作品のなかでいわれている祖国愛はアメル先生のものであって、フランツ少年たちとは関係がない。そこを混同するようにドーデは作品を書いている。

主人公のアメル先生はどうか。フランスから派遣されてきた。フランス語教師として、アルザスの民衆層にフランス語を普及させるのが目的だ^{*15}。40年間も悪戦苦闘したが、ドイツ系アルザス方言を話す人々には、そのフランス語教育の効果がでていない。フランツ少年を筆頭にして、いくつもの箇所に明らかだ。

奴隷になっても母語を守れば解放される。「フランス語を忘れるな」というアメル先生のことばは、的外れもはなはだしい。フランツ少年たちに投げかけてはならない種類の台詞であ

る。なぜならば、フランス領になっているアルザス地方の人々は、すでにフランスの奴隷にされているのが実状だからだ。今から奴隷になるのではない。すでにフランスの奴隷である。フランスが撤退すれば、奴隷の身から解放される。そういう人々に向かって、押しつけた「フランス語」を忘れるな、もないものだ。

ドーデ作品に対して一般に捧げられる祖国愛、愛国心の内容は、なにか。いまいちど吟味する必要がある。

「最後の授業」にあっては、その「祖国愛」とはフランスおよびフランス語を愛することだ。大国意識を前面に押し出したフランス愛国主義を宣伝する政治作品だということができる。支持するのはドーデ信奉者だけだろう。田中克彦はこう指摘する。「最後の授業」は、言語的支配の独善をさらけ出した、文学などとは関係のない、植民者の政治的煽情の一篇でしかない(127頁)

フランスとプロシアの両大国にはさまれたアルザス人の悲哀に注目する考えが、ドーデにはもとからない。被圧迫弱少数民族に同情するどころか、フランツ少年を利用して操り人形に仕立てフランス万歳を強調している。しかも、ドーデは、アルザス人に対する蔑視の感情を隠そうとはしない。

アメル先生は、わがままだった自身の態度を反省してみせる。だが、一方ではっきりと「君たちの両親は、君たちが教育を受けることをあまり望まなかった。わずかの金でもよけい得るように、畑や紡績工場に働きに出すほうを望んだ」とフランツたちの両親を非難した。子供の教育よりも金銭を重視したと責める。日常生活費用に不足して子供を働きに出さざるをえないのかもしれない。そういうアルザス人の経済状況を推測する姿勢も考えもないかのようだ。

また、「いつも勉強を翌日に延ばすのがアルザスの大きな不幸でした」と言わせている。学習することを嫌悪するアルザス人だと批判した。

ここの民族差別がある証拠だ。

これらの部分は、胡適は漢訳しなかった。だからといって、作品を漢訳した責任から逃れることはできない。

被圧迫弱小少数民族を軽蔑したうえに、圧迫者であるフランスの愛国主義を歌い上げたのがこのドーデ作「最後の授業」である。

アルザス人の立場にたてば、これほど欺瞞に満ちた作品も少ないのではないか。

こういう愚にもつかない作品が、胡適にとつては名著なのだ。

胡適がいう名著とは、当時の社会一般、あるいは留学中のアメリカにおいて名著だといわれている作品を無自覚無批判に名著だといっているにすぎない。

胡適は、意識のうえで著者ドーデとひとつになっている。彼にはフランス領アルザス地方の人々に同情する気持ちはまったく、ない。作品それ自体に問題があるという認識も、ない。

胡適は、なぜ漢訳する気になったのか。

胡適が漢訳した意図

漢訳につけた訳者の前言が参考になるだろう。

この前言は、初出に近いと思われる文章と、のちに『短篇小説』第一集に収録したものには、わずかだが異同がある。

初出の『大共和日報』(1912.11初旬)は、作品名「割地」で掲載したようだ。私は、実物を見ていない。ただひとり韓一宇が実物の新聞で一部分を確認しただけではなからうか。日にちが確定できない理由である。

つぎは同じ題名(角書は短篇小説)で『留美学生季報』2巻1期(1915.3. 未見)に転載された。さいわい、前出の張偉「《最後一課》漢訳溯源」146頁に本文冒頭1頁の写真が掲げられる。かろうじて文字を読むことができる。これを引用したい。

上海で刊行していた年刊『留美学生年報』が、1914年より改題して『留美学生季報』になった

という。

該誌「編者誌」によれば、編者の友人が(胡)適之で、かつて上海某報に登載したもの、とある。上海某報とは、3年前の『大共和日報』だ。編者は、作品について「前々からその深い悲しみと味わいが愛されてきた(夙愛其沈痛雋永)」と書いている。公表当時から中国人読者も、ドーデ流「母語が奪われる+祖国愛」に手もなく引っかかっているわけだ。訳者の胡適はその最初の人だといっていい。

写真から文字をおこす。[]はのちに『短篇小説』第一集に収録したときの異同箇所である。句読点、改行、異体字は注記しない。傍線は使用されていない。

著者都徳[追加：Alphonse Daudet]生於西歷千八百四十年。卒於千八百九十七年。為法國近代文學[変更：章]鉅子之一。當西歷千八百七十年。法國與普魯士國開戰。法人大敗。普軍盡據法之東境。明年進圍法京巴黎[追加：破之]。[削除：法人力竭求和。][追加：和議成，法人]賠款五千兆弗郎。約合華銀二千兆元。蓋五倍於吾國庚子賠款云。賠款之外。復割阿色司娜兩省之地。以與普國。此篇托為阿色司省一小學生之語氣。寫割地之慘。以激揚法人愛國之心。[削除：原名「最後一課」今名乃譯者所更也。] 民國元年九月記於美國。

(改変前の文章を訳す)著者ドーデは、1840年生、1897年卒。フランス近代文学の巨人のひとり。西暦1870年、フランスはプロシアと開戦した。フランスは大敗し、プロシア軍はフランスの国境東側をすべて占領。翌年、フランス首都パリを包囲する。フランス人は力をつくして和議を求め、賠償金は50億フラン、中国の銀約20億元に相当し、我が国の義和団事件賠償金の5倍にのぼるといふ。賠償金のほかに、アルザス、ロレーヌ両省の地を割いてプロシアに譲っ

た。この作品はアルザス省のある小学生の語りにより、領地割譲の悲惨さとフランス人の愛国の心を奮い立たせるものである。原題は「最後の授業」であるが、今の題名は訳者が変更した。民国元年九月アメリカにて記す

末尾の日付は変えずに、内容にはいくつかの変更箇所がある。[]に示した通りだ。見ていこう。

ドーデのアルファベット綴りを追加した。親切なようであり、知識をひけらかしているようでもある。

「フランス人は力をつくして和議を求め」を削除した。フランス人の立場に立てば、あまりほめた表現でないことを胡適は理解したからだろう。書き換えて「和議が成立し」と表現をおさえた。

『短篇小説』第一集に収録するにあたり、翻訳名を「割地」から「最後一課」に変更したことがわかる。

胡適は、「領地割譲の悲惨さとフランス人の愛国の心を奮い立たせるもの」と作品の主題をまとめた。これは、ドーデ流「母語が奪われる+祖国愛」を忠実に後追いたしたものにはかならない。『留美学生季報』の編集者もまた、それと同じ方向でくり返した。

「領地割譲の悲惨さ」にもとづいて漢訳題名が「割地」だ。

この説明文において、アルザス、ロレーヌの割譲を述べるほかに、強調されているのは賠償金の金額だ。

義和団事件賠償金と胡適のアメリカ官費留学

中国でいう庚子賠償金、すなわち義和団事件賠償金である。それを上まわるフランス側の負担金額であることを胡適は力を入れて説明している。

それにしても、賠償金は50億フラン、中国の

銀約20億元などと、どこから入手した数字なのだろうか。アメリカにあって独自に調査したのか。出典を明示しないのは、常識の範囲内であるという考えなのか。疑問が出てくる。

確認するために、私も調べた。

1900年(庚子)の義和団事件後、1901年に列国は賠償総額4億5,000万両(年4分の利子)を要求し清国側がそれを受諾した*16。

ついでながら、日本への分配額は約3,500万両だという*17。

清国の負担した4億5,000万両は、フランに換算すると16億8,750万フランになる*18。

胡適が示したフランスの賠償金は50億フランだ。計算すれば義和団事件賠償金の2.96倍にしかない。胡適が示す5倍とは一致しないところが不思議だ。

胡適が「割地」を掲載する2年余り前の『留美学生年報』第2年(1913.1)に、彼自身が論文「賠款小史」を書いている。1840年のアヘン戦争からはじまり、賠償金額を数えあげて義和団事件賠償におよぶ。これには「記者」の説明がつく。興味深いので原文を引用する。

昔者一千八百七十年普法之戦、法軍大敗、失地無算、普軍追奔逐北、進攻法京巴黎、法人力竭議和、割地垂薩司全省、賠款五千兆弗郎(合英金二百兆鎊、合墨銀二千兆元)、蓋三倍於吾国之賠款矣*19。

昔1870年、プロシア・フランス戦争でフランス軍は大敗した。国土を失いとまらない。プロシア軍は追撃してフランスの首都パリを攻撃した。フランス人は力をつくして和議を求め、アルザス全省を割譲し賠償金は50億フラン(イギリス金2億ポンド、メキシコ銀30億元に相当する)、我が国の賠償金の3倍にのぼる。

胡適が「割地」(のちの「最後一課」)につけた前言を見てほしい。「フランス人は力をつ

くして和議を求め(法人力竭求和)」は、記者の書く「法人力竭議和」をそのまま無断借用している。また、プロシア・フランス戦争と賠償金についても、記者の文章に基づいている。「事実は誰が書いても事実にすぎない」中国人が好む表現だ。しかし、上の部分を見れば、他人の文章からの無断借用であることを否定することはできない。

記者は、正しく3倍だと書いている。胡適は、それを水増しして「5倍にのぼる」とした。ここに誇張がある。どのみち賠償金が、清朝政府にとっての大きな負担になったのは事実である。

私がこの義和団事件賠償金に注目するのは、胡適のアメリカ官費留学に関係するからだ。

胡適は、数えて十四歳の時、兄に従って上海に出た。梅溪学堂、澄衷学堂で学んだのち、中国公学(日本留学生が創設した私立学校)に入学する。中国公学が解散すると、中国新公学が設立され胡適は英語の教員となった。1908年十八歳のときだ。一時期、王雲五(中国公学で胡適に英語を教えた。のち商務印書館勤務)の推薦で華童公学国文教授になるが、素行不良で辞職する。北京で実施された第2回アメリカ留学官費生に応募することにした。旅費は友人からの援助を受けた。科挙の試験制度は廃止され、出世の道は外国留学しかない、と思い定めたからだ。70名中第55位で合格すると、そのまま上海経由でアメリカに渡りコーネル大学農学部に入學した。1910年のことである*20。

清国からアメリカに支払われた賠償金は、3,293万9,055両(=2,440万0,778.81米ドル)だという*21。

アメリカは、必要経費を差し引いた残りの約1,100万ドルあまり*22を基金とし、中国人学生を対象にした教育事業をはじめることにした。アメリカ留学機構の創設だ。当時、ヨーロッパと日本に大量の中国人留学生が派遣されていたことに対抗する意味もあった。

1909年より4年以内に毎年少なくとも100名

をアメリカに派遣する。第5年より毎年50名まで、相当する賠償金がなくなるまで、という計画だ。対象学生の専攻は、8割が農業、機械工学、鉱業、物理、化学、鉄道、銀行などに割り当てられた。残りは、法律、政治、財政経済、師範などとする。清朝政府は北京に遊美学務処を設立する。留学のすべてを取り仕切り、そのなかにアメリカ留学生訓練学校を設立することも含まれる。これが、1911年の清華学堂(のちの清華大学)である*23。

胡適が最初に進学したのは農学部だった。アメリカ留学生募集の8割が理工系であったことと無関係ではないだろう。農業が肌に合わない、と胡適は1912年に文科へ転科した*24。

清朝政府が膨大な義和団事件賠償金を背負わされて、胡適は、アメリカの官費留学生になった。彼が「最後一課」の前言で賠償金に強い関心を示したのは、そういう個人的な関連があったからだ。

ドーデ流「母語が奪われる+祖国愛」が主題だと考えるならば、胡適は、前言で触れなければならないことがあるだろう。私は、自然にそう感じる。

胡適が漢訳をしたのは1912年だ。それ以前の1910年には、日韓併合が実行されている。胡適は、ひとことも言及しない。

胡適の父は台湾に赴任したことがある。胡適も幼児期に約3年間台湾に滞在した。日清戦争に敗れ、胡適の父親は台湾を離れた。その時すでに病気になっており廈門で病死した。

日清戦争後1895年4月に締結された講和条約がある。その第1条には「清国は、朝鮮国の完全無欠なる独立自主の国たることを確認す」とある。第2条が「台湾全島及び其の附属諸島嶼」の日本への割与(割譲)だ*25。

胡適が「最後の授業」を漢訳したのは、自分の台湾経験があったからだ。彼がそう書けば、読者はまだしも納得したかも知れない。だが、胡適はそれに触れることもない。

結局のところ、日韓併合も台湾割譲も胡適の意識にのぼることはなかった。発言していないことが、それを証明している。のちのちまでも完全に無視し続けた。胡適にしてみれば、義和団事件賠償金に興味の中心があったのである。中国の研究者が、いくら歴史事実をあげて胡適の漢訳意図を推測し説明しても、それらはこじつけの域を出ない。

中国における昔の研究

中国の学界では、胡適「最後一課」をめぐるどのような発言があったのか。あるいは、あるのか。

ご注意をひとつ。本稿ではあくまでも胡適の「最後一課」をあつかっている。胡適以外の翻訳については、基本的に取りあげない。必要ならばそのつど説明するつもりだ。

よくいわれるのは、胡適「最後一課」が教科書に採用されて広く読まれた、ということだ。中国では、教材として著名である。すると、翻訳作品として文芸批評の対象になっていないのではないか。

1917-1984年に発表された研究論文を収録する「胡適研究資料散見篇目索引」(1989)*²⁶を見る。

日本で刊行されている研究誌『野草』までも採録する。長期間および広範囲に研究文献を探索していることがわかる。ところが、「最後一課」を表題に使用した論文は1篇もない。内容を知っているからわかるのは、例外的に1925年の顧仁鏘「『胡訳』」ほか1篇があるだけだ。胡適の翻訳そのものを批判する。この事実も胡適訳「最後一課」が教材として考えられていたことを証明している。

『短篇小説』第一集は、1940年で二十一版を増刷するくらい多くの人々に読まれた。そう説明すれば、賞賛の声が多いとは推測できる。ただし、おおかたはドーデ作品の内容について述べるだけのものである。もうすこし深く掘り下

げ、視点を転換して、胡適の漢訳そのものを考察した文章はないのか。翻訳ならば、底本の特定が最優先されなければならない。私は、そう考えている。原文と漢訳を比較対照することから研究がはじまる。

まず、底本についてはいかなる見解が示してあるのか。

本稿で明らかにした胡適漢訳の底本問題は、こうだ。胡適は、英語重訳にもとづいて漢訳した。フランス語原文からではない。

中国の研究者は、どう書いているか。

傅斯年「訳書感言」(1919)*²⁷に触れておく。

傅斯年は、翻訳を論じて基準を示す。最もよいのは、直訳だ。最もくだらないのは、林琴南とその同調者だ。531頁

傅斯年が該文で持ち上げるのが胡適である。ところが、胡適の「最後一課」は、フランス語原文にもとづいてはいない。省略は多く直訳でもない。持ち上げたつもりが実際に行なった翻訳は、林琴南と同じになる。そう指摘したところで、傅斯年は、なんとも感じないだろう。胡適を称讃し、林琴南を嘲罵することが、最初から決定しているからだ。

胡適漢訳の初出が1912年だ。1925年の次の文章は遅ればせながら、ということになる。

顧仁鏘「『胡訳』」(1925)*²⁸がある。

「胡訳」という題名は、胡適の訳文という意味だ。これには、「胡説(でたらめをいう)」という意味がかけてある。胡適のでたらめな翻訳、という顧の真意を表明しているのだ。

顧仁鏘は、夏休みに英語を教えていた。英訳「最後の授業」を教材に使用していたところ、教え子が胡適の訳本(第七版)と対照して、同じではないという。ここからもわかる。ドーデの作品は、しかも英訳を使ってこのように教科書として考えられていた。

そういういきさつがあって、顧仁鏘はフランス語原文と英訳の両方を8カ所にわたって引用する。胡適漢訳も掲げながら比較検討している。

顧の結論は批判になる。胡適漢訳文は、大幅な削除と意識とを重ねている。標題の「胡適のでたらめな翻訳」というわけ。

顧仁鏑は、彼が使用した英訳について説明していない。語句を見ると本稿で紹介したアイヴス英訳だと私にはわかる。胡適漢訳の底本ではない。その分説得力が減少する。ただし、顧仁鏑にしてみれば、文章の主眼は胡適漢訳の削除と意識を指摘するところにある。底本の特定を目的としていない。一般の読者は気にしなかっただろう。

顧仁鏑は、誤訳、訳語の不適切、大幅な削除について『短篇小説』第八版で修正するように忠告する。だが、本稿で1931年十五版を使用して検証したように、胡適は本文を改正することはなかった。

顧仁鏑の文章には、別人の短文がつづく。

為法「写在『胡訳』之後」(1925)*29だ。「『胡訳』のあとに書く」とそのままである。

為法は雑誌『洪水』の編集者だとわかる。友人顧からの投稿を受けて、没書にしようとはじめは考えた。中国の有名人は、人が何を言おうが恐れない。漢訳が原文とは大違いだといったところで、他人のことは、かえって広告をするようなもの。その人の価値を上げるホラになる*30。

それを覆して掲載した理由があった。漢訳の底本に関係するから私の興味を引く。以下はその大要である。

『短篇小説』の「最後一課」という翻訳の前後を見ても、彼(胡適)が英訳から重訳したとは書かれていない。「最後一課」の4字の下にフランス語題名がつけてある。これは彼が原文によって訳出したものだと明らかに告げている。顧君がフランス語のほかに英語を添えたのは、顧君が慎重であるとはいえ、まさに余計なことだった。ところが、胡氏は訳して削除しさらに削除する、誤ってまた誤る。平素の詭弁を使って平気で、自分でわかっていないのではないが、

胡氏のやはり「でたらめ訳」ではなかろうか。胡氏のフランス語がどのようなものか、推測するのもむつかしくはない!

為法も顧仁鏑と同様に胡適訳「最後一課」を罵っている。底本に言及している箇所を見る。胡適が、漢訳にフランス語題名を添えたことを根拠にした。為法は、胡適がフランス語原文によったと信じた。それにしても、削除誤訳が多い、ということになる。胡適のフランス語能力に疑問符をつけた。

本稿では、胡適がよったのはフランス語原文ではなく英語重訳(レイノルズ英訳)であることを明らかにした。上の為法の文章を見ると、胡適がほどこしたいくつもの小細工は、中国人読者を欺くのに有効であったことがよくわかる。漢訳題名の下にフランス語もどきを付けるだけで、読者はフランス語原文からの直訳だと誤解してくれた。

かといって、ドーデ「最後の授業」そのものに問題がある、と気づいているわけではない。あくまでも胡適漢訳に限定している。

中国における今の研究

中国でもドーデ流「母語が奪われる+祖国愛」が、疑われることなく前面に登場する。本稿の冒頭で『中国大百科全書』、あるいは郭延礼、韓一宇らを紹介した。予想されるところだ。

本稿で問題にしている底本については、中国の研究者はどのように見ているだろうか。

王錦厚『五四新文学与外国文学』(成都・四川大学出版社1989.10/1996.6第二版)は、たしかに胡適「最後一課」に言及している(563-564頁)。胡適本人の文章を長く引用する。彼の『短篇小説』第一集が亜東書局(亜東図書館の間違い)から出版されると広範な反響を引き起こした、とも書く。その証言を李劫人、穆木天らの文章から引いてきてもいる。だが、彼はどうやら胡適がフランス語から直接翻訳したと考えているらしい。「最後一課」と「柏林之圍」

にフランス語原題をわざわざ挿入しているところからそう理解した。それだけのことにすぎない。

前出、郭延礼『中国近代翻訳文学概論』(1998 / 2005)に言及がある。胡適の翻訳を紹介する。しかし、「最後一課」については、こちらにもそれがあるという程度のものだ。

胡適は英語に通じていた。彼の翻訳はおおよそ原著にかなり忠実である。彼は英語以外の他言語の作品を翻訳しているが、使用した多くは英語本である。ただし、意図的な削除および加筆を見いだすことはない。私(郭延礼)は、胡適漢訳のフランスはモーパッサンの「メヌエット(梅呂哀 Menuet)」と現代の李青崖訳の「曼律舞」を対照して読んだが、小説中人物の名前の音訳が比較的隔たっているほかは、翻訳の主体は基本的に原著に忠実なものだとわかった。

胡適通英文，他的訳文均較忠實於原著，雖然他翻訳英語之外其他語種的作品用的多是英文本，但并没有發現有意的刪節和增加。我將胡適訳の法国莫泊桑の《梅呂哀》(Menuet)和今人李青崖訳の《曼律舞》対読，發現除小説中人物名字的訳音差距較大之外，訳文の主体基本是忠實於原著的。
475-476頁 / 382頁

「最後一課」に大きな削除があることを言わない(後述)。これはしかたのないことだ。「最後一課」を説明したものではないのだから。問題があるとすれば、英訳本からの重訳だといいいながら、フランス語から漢訳した版本と比較している。まったく意味がない。ここは英語訳本も比較すべきだった。

韓一宇の論文 1

胡適訳「最後一課」を本格的に論じるのは、

私の知る限り韓一宇が比較的是やい。はやいといっても2002年だが。1950年代の「胡適思想批判」運動から1966-1977年の「文化大革命」時代は、研究が空白であるのしかたがない。

韓一宇「“陳匪石訳”《最後一課》与胡適訳《最後一課》考略」(2002)*³¹である。

胡適訳「最後一課」と同名だが別人の漢訳がある。匪石訳「最後一課」だ。これが『中国近代文学大系』*³²に収録された時、ふたつの誤りを発生させた。

ひとつは、初出の『湖南教育雑誌』を「1903年」1月の出版だと誤った。すると、胡適漢訳の1912年よりもずっと先行してしまう。中国最初の漢訳は、匪石によってなされた、という誤解を生んだ。もうひとつは、匪石を陳匪石と特定したことだ。推定にすぎない。だが、これを見た研究者の多くは、信用して誤った引用をつづけた。

以上をふまえる。

韓一宇論文の内容を以下のように要約する。

1 都徳著、陳匪石訳「最後一課」が最初の漢訳で『湖南教育雑誌』1903年1月であるというのは誤り。該誌は1913年1月の発行である。

2 匪石が陳姓である証拠は、ない。

3 胡適訳に明らかに存在する削除部分は、匪石訳にも合致する。

4 匪石訳は、最初の胡適訳に基づいて改訳した「偽訳本」である。

韓一宇は、「陳匪石訳」「『湖南教育雑誌』1903年1月」が誤りだと明確に指摘している。2002年の『出版史料(叢刊)』第3輯にも該論文は掲載された。だが、2013年、その指摘を無視する文章が李黙によって書かれている。李黙「周瘦鵑《欧美名家短篇小説叢刊》：“近來訳事之光”」(錢理群主編『中国現代文学編年史：以文学広告為中心(1915-1927)』北京大学出版社2013.5。68頁)だ。「1903年1月刊載在《湖南教育雑誌》上、陳匪石所訳的都徳的短篇小説《最後一課》」と誤りをくり返す。

韓一宇のいう「偽訳本」というのは、あまり見かけないことばだ。その表現に侮蔑が込められていることを感じさせる。

すでにある訳文にもとづいて新しく書き直す。そういう行為を、日本では「再話」などと表現することがある。中国では、「再創作」というのを見かける。吳趸人の『電術奇談』が有名だ。孫楷第が1933年に「すでに翻訳ではなくなっている(已非翻譯性質)」と書いた。確かな根拠があるわけではない。推測にすぎない。それを1979年に盧叔度がむしかえす。孫楷第を引用し「創作」と断定した。1988年、王立言がそれを受けついで「再創作」という。『電術奇談』の拠った原本が明らかになっていない段階で、想像による「再創作」が、研究者のあいだに浸透していった。はっきりいって、無責任な記述である。

『電術奇談』の原作については、日本で発見がなされた。1985年、樽本照雄が菊池幽芳の『新聞賣子』が原作だと指摘したのだ。『電術奇談』と本文を比較対照して「再創作」ではなく翻訳だ、と結論を下した。だが、その後も、中国の研究者は、実物を見ることもなく、本文も比較対照せずしてあいかわらず「再創作」であると主張しつづけている。

同じ行為だが、著名な吳趸人が行なったのは「再創作」で、誰かわからない匪石は「偽訳本」だ。評価のしかたが一貫していない。

郭延礼論文

韓一宇論文を受けて、郭延礼「都徳《最後一課》的首訳、偽訳及其全訳文本」(2008)*³³が書かれた。

『清末小説』第25号に掲載された韓一宇論文を全面的に紹介する。

胡適の漢訳「最後一課」に対する郭延礼の評価は、わからない。愛国主義精神があふれた小説だ。教科書に採用されて「愛国主義教育をおし進める最もすばらしい教材のひとつとなっ

た」絶賛しているといっている。

従来彼が示していた見解を一部修正した個所がある。以前は、胡適の翻訳について、有意の削除および増加はしていない、と説明していた。ところが、該論文では、「胡適は当時の読者の鑑賞習慣を考慮し、彼の訳文には削除があることを私たちは知っている」と改めている。自分が書いた文章であっても過去のものには触れない。そういうやり方だ。正しいのはいつも自分だけ、か。

ひとつ新しい指摘がある。全訳で最初のもの、黄静英「最後之授課」(1915)*³⁴だ、という。黄静英漢訳については、別に論じる*³⁵。

論文題名にも使用している「偽訳」についてひとつ。郭延礼は、林紘の翻訳作品について「再創作」の視点を導入する必要があると主張していた。原文と漢訳が乖離した部分を取り繕うための立論だ。郭延礼のいう林訳「再創作」は「偽訳」にならないのか、と疑問が生じる。用語の不統一である。

韓一宇論文2

フランス文学の漢訳研究については、第一に既出の韓一宇『清末民初漢訳法法国文学研究(1897-1916)』(2008)をあげるべきだ。私は、いつもそう思っている。

韓一宇は、フランス語を理解する。くわえて資料にもとづいた論文を多数発表している。私が、その手堅い論考に注目している理由だ。

胡適訳「最後一課」については、該書第2章において特に「第2節 都徳《最後一課》の早期翻訳と接受」とページを割いて論じる。

そのうちの「一 “首訳”考辨：“陳匪石訳”与胡適訳」は、『清末小説』第25号に掲載した論文を基礎にする。本稿ではすでに紹介した。くり返さない。

つぎの「二 《最後一課》の早期接受」に進みたい。

最初の訳名「割地」から、その漢訳動機を領

土割譲と賠償金の歴史に求める。『胡適留学日記』1912年から引用して、彼が毎日のように考えるのは、亡国の惨状だという。祖国中国の命運を亡国の危機ととらえ、ドーデの作品に重ね合わせる。

胡適漢訳に削除があることについては、好意的な評価を下している。人名の削除は、見慣れない名前がもたらす文化的隔たりを削減する、となる。ならば、ほかの多くの削除はどうなるのか。これには言及がない。1920年代初めから、商務印書館の中学語文教科書に収録された。中国で最も多く読まれ、影響力の大きい訳本となった。そう説明する。

以上が、胡適漢訳についての韓一宇による記述の大要だ。あとは別人による翻訳が紹介されるので、本稿では省略する。

胡適訳ドーデ「最後一課」が、いかに広く中国人に受け入れられたか。韓一宇が強調するのはその点だ、

商務印書館『白話文範』(1920)に収録され半年で4版を重ねた。新学制編写『国語教科書』第2冊(1923)は7年間で112版にのぼった。商務印書館『国語教科書』国難後第1版は1ヵ月で5版になった。それほどまでに広く深く受け入れられた漢訳「最後一課」は、象徴的な意味を持つ。抗日戦争の血と火が、ドーデ作品そのものを中華民族の愛国主義という符号にした。訳者の役割についていえば、「筆で国に報いる(以筆報国)」(筆者注：1915年3月22日付胡適の母親宛手紙に「以筆舌報告」)、という語句を使用している。

しかし、ドーデの「最後の授業」は、被圧迫弱小少数民族を批判し、フランス愛国主義を宣伝する作品である。これを知れば、韓一宇が中華民族の愛国主義を強調すればするほど、ドーデ作品に対して中国人が実践した読みの浅さをますます露呈させることになる。教材として与えた側も、学ばされた生徒も、被圧迫弱小少数民族についての認識がまったくないことを証明

するからだ。ドーデ流「母語を奪われる+祖国愛」に、長年にわたって中国の大勢の人々が、いとも簡単に騙されつづけたということにほかならない。

ドーデの政治作品を評価して、韓一宇の文章が政治作文で終わるものも無理はない。

それよりも、本稿で注目している胡適漢訳の底本についてはどうか。

奇妙なことに韓一宇は、底本について説明をしていない。どうやら、胡適はフランス語原文によって翻訳している、と韓一宇は思いこんでいる。漢訳に削除部分があることは、韓一宇も指摘した。しかし、それはフランス語原文と比較対照して認識したもののようだ。英語重訳が底本かもしれない、という発想それ自体がないらしい。論考としては、不十分だと考える。優秀な研究者韓一宇にしてそうか、といくらか落胆する。

胡適訳ドーデ「最後の授業」に関しては、数多くの論文が公表されている。すべてを読むことができないくらいの数にのぼるだろう。私の知る範囲内で、気のついた文章に触れておく。必然的に紹介は簡単になる。 罫

【注】

- 14) 中本真生子「アルザスと国民国家 「最後の授業」再考」『理想』1998年第5号1998.5.5. 57頁
- 15) ウージェーヌ・フィリップス著、宇京頼三訳『アルザスの言語戦争』白水社1994.1.31
- 16) 竹内実編『日中国交基本文献集』上巻、蒼蒼社1993.1.15。松原真沙子「義和団事件：プロテスタント宣教師の反応と賠償金をめぐって」『千葉敬愛短期大学紀要』第27号2005.3.1 電子版
- 17) 日本外務省ウェブサイト。2013.8.20確認
- 18) 1海関両は、3,750フラン。前出、竹内実編『日中国交基本文献集』上巻。84頁
- 19) 周質平主編『胡適早年文存』台湾・遠流1995。342頁。なお胡適「附：美国退還庚子賠款記」「附：預算分年退還賠款表」もある。
- 20) 耿雲志『胡適年譜』成都・四川人民出版社1989.12。

- 石原皋『閑話胡適』安慶・安徽人民出版社1990.4二版。第2回試験は、1910年8月に実施、71人が合格とある。蘇雲峰『從清華學堂到清華大學1911-1929：近代中國高等教育研究』北京・生活・讀書・新知三聯書店2001.4。16頁
- 21) 清華大學校史編寫組編著『清華大學校史稿』北京・中華書局1981.2。1頁。前出、竹内実編『日中國交基本文獻集』上卷。84頁に1海關兩は、0.742金弗(ドル)とある。計算すれば、2,444万0,778ドルだ。ほぼ正確といつていいか。2,444万余ドルとするのは、前出蘇雲峰『從清華學堂到清華大學1911-1929：近代中國高等教育研究』2頁
- 22) 次の文獻53頁は、「10,000,100」とする。(美)史黛西・比勒 Stacey Bieler 著、張艶訳、張猛校訂『中國留美學生史』北京・生活・讀書・新知三聯書店2010.6
- 23) 前出、『清華大學校史稿』。阿部洋『中國の近代教育と明治日本』福村出版1990.8.10。
- 24) 胡適口述、唐德剛注訳『胡適口述自伝』合肥・安徽教育出版社1999.9。「胡適的自伝」陳金塗編『胡適研究資料』北京十月文藝出版社1989.8、中國現代文學史資料彙編(乙種)、181頁
- 25) 前出、竹内実編『日中國交基本文獻集』上卷、51-52頁
- 26) 陳金塗編『胡適研究資料』北京十月文藝出版社1989.8
- 27) 傅斯年「訳書感言」『新潮』第1巻第3号1919.3.1。影印本。また、羅新璋『翻訳論集』北京・商務印書館1984.5所収のものは、一部分であつて全文ではない。
- 28) 顧仁鏄「『胡訳』」『洪水』半月刊第1巻第4期1925.11.1初出未見 / 第1巻合訂1926.6初版 / 1927.4三版。影印本
- 29) 為法「写在『胡訳』之後」『洪水』半月刊第1巻第4期1925.11.1初出未見 / 第1巻合訂1926.6初版 / 1927.4三版。影印本による
- 30) 批判までも自己宣伝に利用する。中國の慣習であるようだ。私も経験した。ある中國人研究者の著作を書評したことがある。厳しく誤りを指摘した。ところが、その人の再版本を見ると、私が書評に取り上げた、と宣伝に使つている。批判内容までは触れ

ず、ただ書評したという事實を掲げたわけだ。なるほど、そういうやり方をするのだな、と當時は思った。それがまさか、中國學界の傳統であるとは知らなかつた。

- 31) 韓一字「“陳匪石訳”《最後一課》与胡適訳《最後一課》考略」『清末小説』第25号2002.12.1。同氏同題『出版史料(叢刊)』第3輯2002.9
- 32) 施塾存編『中國近代文學大系』11集26巻翻訳文學集一 上海書店1990.10
- 33) 郭延礼「都德《最後一課》的首訳、偽訳及其全訳文本」『中華讀書報』2008.4.16 電子版
- 34) (黄)静英女士訳「(普法戰爭軼事)最後之授課」『禮拜六』第42期1915.3.20
- 35) 「早期漢訳ドーデ「最後の授業」 黄静英訳「最後之授課」のばあい」

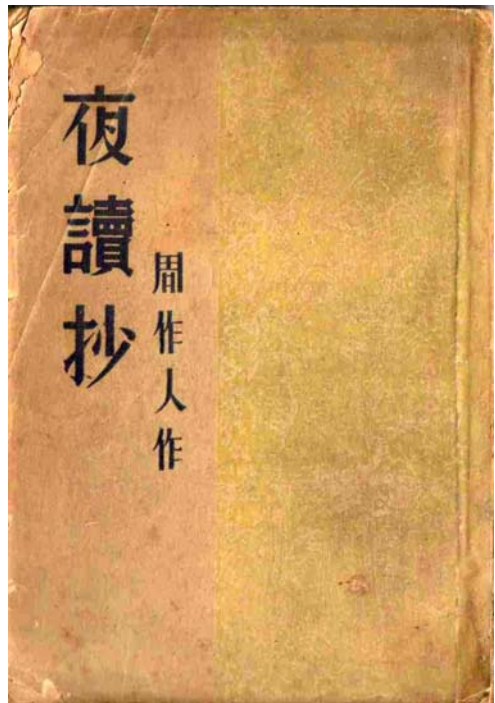
『清末小説から』第113号 2014.4.1

- いくたびかの阿英目録5樽本照雄
《李代桃僵》の原作渡辺浩司
周作人漢訳ヨーカイ・モール1 『匈奴奇士
録』の英訳底本について樽本照雄
徐兆璋日記中的近代小説與出版史料2 以小
説林社為中心樂 偉平
早期漢訳ドーデ「最後の授業」2 胡適訳
「最後一課」のばあい神田一三

周作人漢訳ヨーカイ・モール2

『匈奴奇士録』の英訳底本について

樽本照雄



『夜讀抄』

周作人「黄薔薇」 誤解のはじまり

周作人「黄薔薇」(1931)*⁸から誤解がはじまった。

『匈奴奇士録』は1908年に出版された。それを1931年からふりかえれば23年前だ。時間は相当経過しているといえるだろう。記憶に間違いがあるかもしれない。私は、そう疑う。

周作人の証言を見る。次のように説明する(傍線はカッコに置き換える。[]は止庵の校訂。誤植は日本語訳では正した)。

ヨーカイ・モール ヨーロッパでは、ふつう彼をドクタ・モラス・ヨーカイとよぶ、なぜなら、ヨーロッパ人は、ハンガリー人の先に姓、後に名というのに慣れることができないためである、しかし、私たちはやはり彼本来の呼び方によるほうがよいだろう。は、19世紀の伝奇小説の大家であり、著書は200余部もある。私が漢語に転訳したのはそのなかのひとつ『匈奴奇士録』であり、原題は『神は唯一だ(神是一位 Egy az Isten)』*⁹だ。英訳ではMidst the Wild Carpathiansに改められた『黄薔薇』の英訳者は(ベアトリス・)ダンフォード(Beatrice Danford)女士だが、こち

らの英訳者は、(R・ニスベット・)ベイン(R. Nisbet Bain)氏である。『匈奴奇士録』には私の戊申五月の序があるから、たぶん1909年に出版された。「説部叢書」の1冊である。

育珂摩耳 欧洲普通称他作Dr[.] Maurus Jókai, 因為他們看不慣匈利人的先姓後名, 但在我們似乎還是照他本来的叫法為是,

十九世紀的伝奇小説大家, 著書有二百余部, 由我転訳成中文的此外有一部『匈奴奇士録』, 原名『神是一位』(R[E]gy az Isten), 英訳改為Midst the w[W]ild Carpathians,

『黄薔薇』的英訳者为丹福特女士(Beatrice Danford), 這書的英訳者是倍因先生(R. Nisbet Bain)[.]『匈奴奇士録』上有我的戊申五月序, 大約在一九〇九年出版, 是「説部叢書」裏的一冊。4-5頁 / 3-4頁

もとはヨーカイ・モール作『黄薔薇』(これ

も周作人が漢訳した*10) について説明する文章だ。これに上のような部分が見える。私がこれから追求しようとする『匈奴奇士録』にはほかならない。

こちらの文章のほうが、『知堂回想録』よりも古い。つまり、『匈奴奇士録』の発行から時間的に近いという意味だ。にもかかわらず、周作人の勘違いが見られる。「戊申五月」は、1908年だ。1909年とするのは適切ではない。

もうひとつ、「説部叢書」すなわち商務印書館が刊行していた大型翻訳叢書に収録されているという。間違いではないが、正確でもない。1908年に、前述のとおり「欧美女家小説」の1冊として出版された。「説部叢書」2集第51編に収録されるのは、のちの1915年10月16日付である。

周作人『知堂回想録』では、原作の漢訳は『神是一个』だった。だが、こちらでは『神是一位』と丁寧な表現にしている。なにしろ「神」だから。ならば、「神」は人間か、という人もいだろう。すると、前述した周作人の文言『神一也』のほうがより適訳だ。

底本については、周作人自身が上に明記している。よく見てほしい。

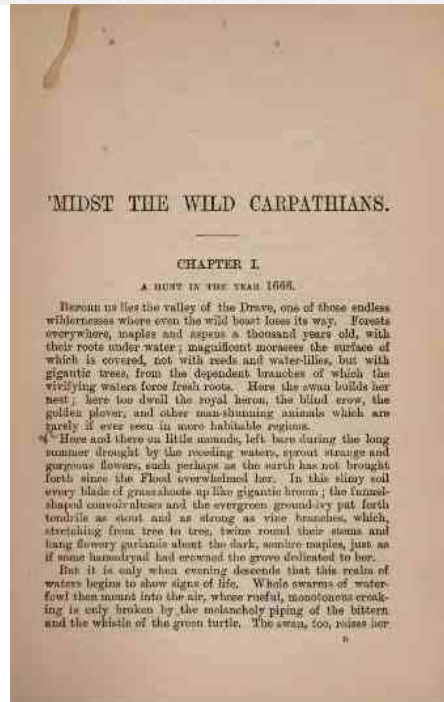
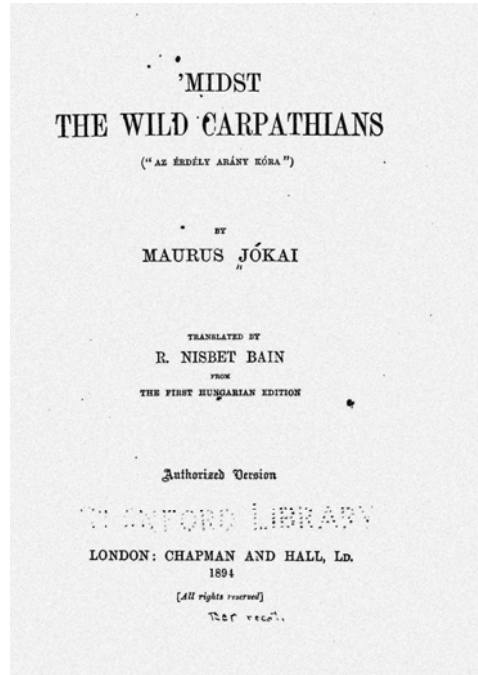
『匈奴奇士録』の原作は、ハンガリー語で *Egy az Isten*. という。英訳では *Midst the Wild Carpathians*. となる。その翻訳者はR. Nisbet Bainだ。

以上のように周作人は説明した。

ロバート・ニスベット・ベイン (Robert Nisbet Bain, 1854-1909) は、英国の歴史家、言語学者、翻訳家である。

予備作業として、すこし調べてみた。

ベインはヨーカイ・モールの作品を英訳して、確かにMAURUS JÓKAI 著 *MIDST THE WILD CARPATHIANS*. (LONDON: CHAPMAN AND HALL, LD., 1894) が存在する。しかし、そのハンガリー語原作は *AZ ÉRDÉLY ARÁNY KÓRA*. である。周作人がいう *Egy az Isten!* とは違う。



扉(「MIDST」アポストロフィがついているところに注目)と本文冒頭

奇妙なことだと思う。周作人の『匈奴奇士録』は、彼が書名までも示しているベイン英訳本 *Midst the Wild Carpathians*. ではないのか。

『匈奴奇士録』に関する周作人自身の証言、

特に底本とした英訳本については、信用することができない。周作人にとってはあまりにも昔のことすぎて記憶があやふやになっているのか。あやふやだとしても、英文題名を明確に示してはいるのだが。正しい底本を追求する必要が生じる。

『匈奴奇士録』そのものにおいて、周作人はほかに何か解説していないか。

『匈奴奇士録』の「小引」

周作人の「小引」は、すでに引用して紹介している。もういちど、引く。

今ここに訳すのは、(18)77年作、原題は Egy az Isten! その意味は「神は唯一だ」。

なんど見てもはっきりしない。ヨーカイ・モールの原作のことではない。底本とした英訳本である。その理由は、周作人がこの箇所では使用した英訳について説明をしていないからだ。

たとえば、魯迅、周作人兄弟が漢訳してあの有名な『域外小説集』がある。諸外国の短篇を集める。だが、収録したそれぞれの作品について、何語によったのか説明しない。つまり、基づいた底本については、なにも書いていないのだ。該書に限らず、当時は、そのやり方が普通だった。原作者の名前はあげても、底本を示さない。林訳小説もそうだ。林紓とその共訳者は、明記しなかった。文学革命派にそこをつかまえられて、批判の材料に利用された(林紓冤罪事件)。

そういう慣習があった。周作人が「小引」で英訳本を明記しなかったことも、別に怪しむことではない。

『匈奴奇士録』の英訳底本については、『夜読抄』に収録してある文章がいちばん詳しい。ところが、そこで周作人が示したペイン英訳本が、ヨーカイ・モールの Egy az Isten. とは関係がなさそうなのだ。疑問が深まる。

専門家たちは、どう説明しているだろうか。底本の不明確さに気づいた研究者は、いるのか。

今までの専門研究いくつか

以下は関連論文を網羅しているわけではない。あくまでも私の目に触れた専門書という範囲内であることをいっておく。細かな言及については、いちいち触れない*11。

つぎに掲げるのは専門書の、それも一部分である。

私が見る限り、『匈奴奇士録』になると、どういうわけか研究者の言葉が少ない。

黄俊東『現代中国作家剪影』(1972)*12がある。中国の「文化大革命」中に香港で刊行された。短文随想を集めたものだ。

そのなかのひとつに「五、知堂老人的訳著」が収録される。『知堂回想録』を下敷きにして記述しているのがわかる。『匈奴奇士録』については、わずかな言及があるだけ。

引用すれば、「結果就是「匈奴奇士録」的印行(匈牙利育訶摩爾原著,一九〇七年商務版。)」(28頁)となる。

1908年が正しい。当時にして、言及があるというだけでも目を引く。それくらい情報が少ない。

張菊香、張鉄栄『周作人研究資料』上下(1986)*13は基本資料ということができる。関係するのは5行だが、そのうちの2行を引用する。

匈奴奇士録(匈牙利育訶摩耳著中篇小説)

周遠訳, 商務印書館, 1908年9月初版。

911頁

「言情小説」という角書を採取していない。ヨーカイ・モールの漢字表記が異なる。実物に見えるのは「育訶摩耳」だが、「育訶摩耳」とするのは1字を見誤ったか。「1908年9月初版」は、いつもながらの新暦旧暦混用である。

こういう基礎資料は、のちの研究に影響をあたえる。つまり、一般的にいうのだが(例外があるのは承知のうえ)、目録類に収録する翻訳作品のばあい、原作者と原作を注記しないことが普通に見られる。上の『周作人研究資料』でも同様だ。すると、研究者は、原作などを明記する必要はないという判断に短絡するらしい。次の専門書は、そういう例のひとつだ。

銭理群『周作人伝』(1990)*¹⁴である。周氏兄弟が協力した成果だといって翻訳作品名を複数かかげる。そのなかで「《匈奴奇士録》(〔匈牙利〕育珂摩爾著)」(127頁)というのみ。底本の英訳などには触れない。まるで関心がないかのようだ。

徐從輝編「第三輯 周作人著訳系年」(『周作人研究資料』下巻 天津人民出版社2014.1 中国現当代作家研究資料叢書)でも同じである。探求する努力をしたようには見えない。放置している。

翻訳関係書、あるいは翻訳文学史は、どのように紹介しているか。

李孝風「匈牙利文学在中国」(1997)*¹⁵は、要領よくまとめている。

周作人の漢訳ヨーカイ・モールをふたつあげる。すなわち、「中短篇小説《黄薔薇》(商務印書館, 1927年)和《上帝只有一个》(見《匈奴奇士録》, 上海商務印書館, 1933年)」(791頁)だ。

「神は唯一だ」に「上帝」を使った独自の漢訳をつけている。それを見ると、李孝風はハンガリー語を理解するのだろう。ただ、底本の英訳本に言及せず、なぜだか1908年初版本も説明しない。 ㊦

【注】

8) 周作人「黄薔薇」1931年執筆(『周作人研究資料』下688頁)。次に収録。『夜抄抄』上海・北新書局1934.9付印、1935.6再版/止庵(王進文)校訂、北京出版集团公司、北京十月文藝出版社2011.3 周

作人自編集。頁数は北新書局/止庵の順。

9) あとで述べるが、英訳 *God is one.* から「神是一位」が出てくる。別の英訳では、*One is the Lord.* になっている。日本語訳として「唯一の主である」をあてておく。「主」と「神」は同じと理解する。「マナセは、主こそ神であることを知った」という語句があるという。マナセ関連で次を補足する。「マナセ(王) 正教会では「マナッシャ」。ユダ王国の王。旧約外典(続編)の『マナセの祈り』が生まれた」『岩波キリスト教辞典』岩波書店2002.6.10。1067-1068頁。周作人の漢訳と直接の関係があるというわけではない。

10) 育珂摩爾著、周作人訳『黄薔薇』上海・商務印書館1927.8。「序」において「戊申五月余曾訳Egy az Isten一卷, 易名匈奴奇士録, 印行於世」と書いている。前出阿英編『晚清文学叢書』小説戯曲研究巻に収録した「小引」にも、正しい書名をしるしている(298頁)。周作人著文、鍾叔河編訂『知堂序跋』(北京・中国人民大学出版社2004.9、13頁)は「匈奴奇士録」とそのままだ。

11) 『匈奴奇士録』への言及情況について、現在編集中の樽目録では以下のように記述している。部分を示す。「説部叢書」もあげる。本稿で示した文献は省略する。文献の略称については、清末小説研究会ウェブサイトで開催している『清末民初小説目録第6版』の「説明」を参照されたい。

「小引」で「原名EGY AZ ISTEN!」とする[理論572][阿研298]「匈奴奇士録」小引[中村S3-60]JOKAI MOR “EGG^㉙ AZ ISTEN”。『翻訳名家研究』19頁は「匈奴奇事^㉙録」9月とする[『東方雑誌』8:1廣告](言情小説)欧美名家小説[劉民772]『東方雑誌』8巻1号廣告(言情小説)欧美名家小説[虛白53]角書不記、育珂摩爾JOKAI MOR、EGG^㉙ AZ ISTEN、刊年不記[蒲梢292]同左[唐平3140]角書不記、約卡伊とする、訳者不記、1908[唐書11]角書不記、1908.9初版[營業356][陸昕05]陸昕は表紙写真を掲げる(色彩写真、135頁)、表紙に「欧美名家小説」の表示あり、説明して光緒三十四年九月初版[劉晚362]育珂^㉙摩耳著[涵訳60]角書不記、匈加利育珂摩耳著、光緒三十四年[版補下313]角書不記、匈加利^㉙育珂摩耳著、光緒三十四年[祖毅738]育珂摩爾著、周卓^㉙(作人)

訳「匈奴騎士録」[広告2-271]書名のみ、1905⁷³年初版と誤る

「説部叢書」「小引」で「原名EGY AZ ISTEN!」とする[民外2185]1908年初版訳者署名周連。1908.9初版 / 1915.10再版、説部叢書2集第51編[漢訳2759] (匈)MÓR, JÓKAI著、1908 (光緒三十四)9初版 / 1915.10再版、説部叢書二集、原書EGY AZ ISTEN. 歴史小説[現代908]は「匈奴騎士録」とする。1908.9初版 (新暦旧暦混用) / 1915.10再版、説部叢書第2集第51編[大典169]は1908.10.12⁷³に誤る / 1915.10.16再版[商目95]言情、M. JOKAI: EGG⁷³ AZ J⁷³STENとする、刊年不記[編年222][大康05]光緒三十四年版[陸昕05-136]表紙写真あり、民国四年十月再版本[慧敏482]説部叢書2=51[曉元229][劉晚362]説部叢書2集51編

- 12) 黄俊東『現代中国作家剪影』香港・友聯出版社有限公司1972.12
- 13) 張菊香、張鉄栄『周作人研究資料』上下 天津人民出版社1986.11 中国現代文学史資料彙編(乙種)
- 14) 錢理群『周作人伝』北京十月文藝出版社1990.9
- 15) 林煌天主編『中国翻譯詞典』武漢・湖北教育出版社1997.11

中国人民大学文学院編

『翻譯与二十世紀中国文学研討会論文集』

北京・人民文学出版社2012.2

- 20世紀初中国女性文学翻譯家群体論.....郭延礼
- 從“冒險”魯濱孫到“中庸”魯濱孫 林紆訳介《魯濱孫飄流記》的文化改写与融通李 今
- 家与国的扶栻：晚清 ROBINSON CRUSOE 諸訳本中的倫理困境崔文東
- 近代西学東漸的起点趙稀方

從“漢文訓読”到“東瀛文体” 訓読、翻譯与東亞近世的文体構建

陸 胤
《人生頌》在晚清的又一漢訳及其意義...羅文軍
想像域外 民初鴛鴦蝴蝶派對西方的訳介
.....胡安定

ほか

北京魯迅博物館編

『魯迅翻譯研究論文集』

瀋陽・北方聯合出版伝媒(集團)股份公司、春風文藝出版社2013.11

翻譯与独創性 重估作為翻譯家的魯迅

.....(澳)寇志明著 姜異新訳

周氏兄弟早期著訳与漢語現代書写語言...王 風
魯迅の両篇早期訳作

(英)卜立德
魯迅早期三部訳作的翻譯意図

.....(日)工藤貴正著 趙静訳 陳福康校

民元前魯迅的翻譯活動 兼論晚清的意识風尚

.....(香港)王宏志

魯迅《造人術》の原作

.....(日)神田一三著 許昌福訳

最後部分184-185頁に別論文からの混入がある

魯迅《造人術》の原作・補遺

.....(日)神田一三著 許昌福訳

魯迅与儒勒・凡爾納之間.....(日)山田敬三

關於魯迅的《斯巴達之魂》

.....(日)樽本照雄著 岳新訳

ほか

李志梅『報人作家陳景韓及其小説研究』華東師範大学2005.4 2005届研究生博士学位論文 博士論文

林大津総主編『福建翻譯史論・古代卷』厦門大学出版社2013.6

蘇 暢『俄蘇翻譯文学与中国現代文学の生成』

北京・社会科学文献出版社2013.9

李 琴『中国翻譯文学与本土文学の互動關係研究』北京・中国社会科学出版社2013.9

就《申報》刊《繡像小説》廣告

—與樽本照雄先生商榷

王 文 君

阿英先生在《晚清文藝報刊述略》指出：“《新小説》在日本發刊後，繼之而起的，有《繡像小説》。半月刊。李伯元主編。始刊於光緒癸卯（一九〇三）年五月，至丙午（一九〇六），因伯元逝世休刊，共行七十二期。”¹如果《繡像小説》是正常按期出版，不存在脫期現象，那麼這一結論是可以成立的。樽本先生通過羅列《世界繁華報》、（天津）《大公報》、《中外日報》、《申報》、《東方雜誌》刊載的《繡像小説》出版記錄，同時列《同文滬報》和《消閒錄》備考，列出了《繡像小説》刊行一覽表²。以當時報刊登出的廣告信息判斷出《繡像小説》在發行中出現了延期，從而確認其停刊的延時。

由樽本先生所列《〈繡像小説〉刊行一覽》可知，在諸多刊登《繡像小説》廣告的報刊中，前二十四期廣告以（天津）《大公報》最為完整，後四十八期以《中外日報》最為完整。沒有一種報刊完整刊登《繡像小説》發行廣告，《申

報》刊《繡像小説》廣告既不完整且沒有連續性，也不具有典型性。筆者閱讀《申報》時發現實際所刊廣告與樽本先生所列出出入，以先生治學態度之嚴謹，或是囿于時地未能全面查閱《申報》刊《繡像小説》廣告；或是更關注《繡像小説》早期即已出現出版延期情況，著重于天津《大公報》和上海《東方雜誌》³，對《申報》的廣告資訊僅做簡單羅列以備參考而已。

現列樽本先生一覽表中所列《申報》刊《繡像小説》廣告：

1. 光緒三十一年乙巳年：

| 時 間 | 《繡像小説》期(冊)數 |
|-------|-------------|
| 六月初十 | 第35期 |
| 八月十二 | 第41、42冊 |
| 九月廿七 | 第43冊 |
| 十月初九 | 第44冊 |
| 十一月初五 | 第45、46冊 |
| 十二月十五 | 第49、50冊 |

2. 光緒三十二年丙午年：

| 時 間 | 《繡像小説》期(冊)數 |
|-------|-------------|
| 正月廿九 | 第49至52冊 |
| 三月廿八 | 第53、54冊 |
| 六月初八 | 第57冊 |
| 六月十五 | 第57、58冊 |
| 八月初七 | 第60、61冊 |
| 九月初一 | 第62至64冊 |
| 十月廿七 | 第65至67期 |
| 十二月初六 | 第69期 |
| 十二月廿一 | 第72冊 |

即，光緒三十一年六月初十到三十二年十二月廿一期間，《申報》曾刊登《繡像小説》第35冊到第72冊的出版信息，缺第36至第40期、第47期、第48期、第55期、第56期、第59期、第68期、第70期、第71期。

作者简介：王文君（1988-）女，南京大学文学院中国古代文学专业博士研究生。（江苏，南京，210046）

¹ 阿英：《晚清文艺报刊述略》，上海：古典文学出版社1958年版，第17页。

² 樽本照雄：《〈绣像小说〉的出版延期》，《清末小说研究集稿》，济南：齐鲁书社2006年版，第48-53页。

³ 樽本照雄：《清末小说研究集稿》，第90页。

樽本先生所列《申報》刊《繡像小說》廣告與實際材料的出入，大致可分為兩種：

1. 事實性錯誤。

經反復查驗，光緒三十二年十月廿七（第65至67期）與光緒三十二年十二月初六（第69期）的《申報》並無《繡像小說》廣告。十月廿七第4版中有關於商務印書館的《贈書致謝》廣告：“商務印書館贈《比較國法學》一冊……又贈《博物示教》一冊……”，不涉及《繡像小說》，其餘版面也並無《繡像小說》的廣告。十二月初六第5版、第7版分別有商務印書館的《唱

歌遊戲》、《五彩精圖方字》廣告，無《繡像小說》廣告。

實際的第65至67期的廣告出現在清光緒三十二年十一月初五日第12版，第69期廣告最早出現在光緒三十二年十一月廿九日第11版。

2. 廣告信息不夠精確。

即某天的《申報》的確是刊登了《繡像小說》廣告，但在刊登這一期《繡像小說》廣告的《申報》中並不是最早的，這種情況比較普遍：

| 《繡像小說》期數 | 樽本照雄所列日期 | 實際最早日期 |
|----------|--------------|----------------|
| 第35期 | 光緒三十一年六月初十 | 光緒三十一年六月初七第5版 |
| 第44期 | 光緒三十一年十月初九 | 光緒三十一年十月初七第5版 |
| 第53、54期 | 光緒三十二年三月廿八 | 光緒三十二年三月廿四第5版 |
| 第57、58期 | 光緒三十二年六月十五 | 光緒三十二年六月十一第6版 |
| 第60、61期 | 光緒三十二年八月初七 | 光緒三十二年八月初一第5版 |
| 第62至64期 | 光緒三十二年九月初一 | 光緒三十二年八月十九第11版 |
| 第72期 | 光緒三十二年十二月廿一日 | 光緒三十二年十二月十八第7版 |

格外指出這點是因為當時的報紙往往多天刊載同樣的廣告，例如光緒三十一年十月初七、初九、十月十一、十月十三均刊登了《繡像小說》第四十四期已出的廣告，初九的廣告應比十三的更具參考性。

不僅如此，筆者還關注到《申報》所刊商務印書館廣告分為兩類：一類是贈書廣告，一類是專門廣告。贈書廣告類似於“軟廣告”，一般出現在報紙新聞欄的最末，大多在第四版的末尾或第五版的開端，除介紹新出的商務印書館書籍報刊外，還附以簡單的評論。專門廣告中既有針對諸如《繡像小說》、《東方雜誌》、《華英辭典》等的小型廣告，也有教科書系列、政學叢書、說部叢書等大型廣告。在同一期的《申報》上，甚至可以看到贈書廣告、《繡像小說》、《東方雜誌》、《最新國文教科書》等共同出現的情況，內容非常豐富。樽本先生所列均為《申報》廣告欄的《繡像小說》專門廣告，由此便遺漏了贈書廣告。

《申報》新聞欄《繡像小說》出版信息如下（參看下頁）：

可見《申報》新聞欄不僅有完整的第25-34期廣告，還可補廣告欄中《繡像小說》廣告第36、37、38、39、40、47、48、55、56、59、68和第70期之缺，自第25期到第72期，僅缺第71期而已。對照樽本先生的一覽表，更可將《申報》刊《繡像小說》廣告的時間提前到光緒二十九年五月十八日，這一時間僅僅比《大公報》晚一天，茲附當日的惠謝《繡像小說》如下：

昨承上海勤學會惠示日本《學政纂要》、《與地答問》各一冊，商務印書館惠示《繡像小說》數冊。一則為教科必備之書，一則供酒後茶余文人之消遣，寄語海內同志皆不可不一溜覽也。率書數言藉鳴謝悃。

第五報申
 上海商務印書館
 城內提莊聲明
 律師廣告
 光緒三十二年正月廿九日
 專門廣告

光緒三十二年正月廿九日

專門廣告

志謝繡像小說
 期至五十二期共四冊讀文明小史可以箴砭近日之學界讀活地獄可以警告近日之官場讀掃迷帚可以祛除社會上之迷信讀生袋可以發明生理學之功用蓋小說也而改良政教整齊風尚亦腐於其中矣(頌)

光緒三十二年二月初六日

贈書廣告

光緒三十二年二月初六日第4版《致謝〈繡像小說〉》:

昨承商務印書館贈《繡像小說》第四十九期至五十二期共四冊，讀《文明小史》可以箴砭近日之學界，讀《活地獄》可以警告近日之官場，讀《掃迷帚》可以祛除社會上之迷信，讀《生袋》可以發明生理學之功用。蓋小說也，而改良政教、整齊風尚亦寓其中矣。

從中大概可以看出惠書致謝的主要特點。第一，寫法頗類新聞，有明確的時間和標題，對書籍內容有所評價。第二，往往以褒揚為主，甚至不惜誇大其辭。另外，後期的《繡像小說》惠書致謝文末往往有一個“頌”字，或已出現固定撰寫惠物致謝的作者了。因為惠書致謝往往涉及到對當期小說內容的評價，且在新聞欄中，應比廣告欄的廣告具有更高的可信性。

綜合來看，樽本先生所列的《申報》刊《繡像小說》的問題主要集中在兩點：一是對《申報》刊《繡像小說》廣告缺少甄別，以至於出現了一些失實的情況；一是完全沒有注意到《惠書致謝》從而遺漏了大量有價值的信息。將《申報》刊《繡像小說》廣告的情況復原後，可看出《申報》才是樽本先生所列報刊中最早刊登《繡像小說》出版廣告且唯一有始有終的。就這些因素來考慮的話，在討論《繡像小說》廣告時，《申報》應作為重要的參考對象，在《申報》的新聞欄和廣告欄的廣告之間，又應以新聞欄的更為可取。

從《申報》所刊《繡像小說》廣告可以明顯看到《繡像小說》發行延期，《申報》所刊廣告又可與《中外日報》、《新聞報》、《東方雜誌》互為參考，惠書致謝的材料又可提供其他報刊所無的詳細資料。例如光緒三十二年閏四月初九日的《申報》載：

又《繡像小說》五十五、六兩期，其中《文明小史》已成，全編以立憲結穴，

1903年至1906年（即《申報》刊登商務印書館《繡像小說》的主要時間段）的《申報》中，以商務印書館的《惠書致謝》為最多。再舉兩例惠謝《繡像小說》：

光緒三十一年四月廿八日第5版《致謝第三十二期至三十四期〈繡像小說〉》：

僕生平有小說癖，而於摹寫人情世態諸書尤百讀不厭。南亭亭長，小說名家也，所著《文明小史》描寫社會情形，寓褒貶於言外，挽回薄俗，裨益良多。至《月球殖民地》、《珊瑚美人》、《回頭看》、《賣國奴》諸作，亦皆措詞新穎，寓意深遠，是誠有功世道之文，不僅作小說觀也。特書數言以志欽佩並以申謝悃焉。

頗具含蓄不盡之意。

胡適曾對李伯元下斷語：“他的長篇小説只有一部《文明小史》是做完了的，先在商務印書館的《繡像小説》裏分期印出，後來單印發行。”⁶ 眾所周知，李伯元是光緒三十二年三月十四死去的，在《繡像小説》發行延期現象未被發現時，《文明小史》的作者並不曾成為疑問。

上世紀八十年代，張純和樽本先生分別從《繡像小説》所刊載歷史事實与实际史實的不符和报刊所載《绣像小说》发行广告兩個角度來進行论证，確認《繡像小説》發行的延期，問題由此延伸到《文明小史》的作者問題。二者的共同疑問在於：李伯元死後，《文明小史》的作者是誰？如張純在第三屆“中國近代文學學術討論會”上提交的《再談李伯元與劉鐵雲的文字案》一文指出《繡像小説》第55期發表李伯元《文明小史》第59回的時間是在1906年9月之後，此時離李伯元去世已有半年之久，所以李伯元與劉鐵雲之間不存在文字案的關係。樽本先生也曾明確指出：“《繡像小説》的出版延期問題，不只是一個雜誌的出版日期問題。李伯元死後《繡像小説》還在繼續出版，我們知道這個事實是確鑿的，那麼就不得不考慮可能是別人用了南亭亭長的這個筆名寫了《文明小史》和《活地獄》的一部份。”⁷

罇

⁶ 胡適：《〈官場現形記〉序》，原載李伯元著，汪原放、汪協如標點，亞東圖書館1927年《官場現形記》初版。轉引自《胡適全集》第3卷，合肥：安徽教育出版社2003年版，第550頁

⁷ 樽本照雄：《清末小説研究集稿》，第209頁。

王文君氏へ

『繡像小説』発行遅延問題について

樽本照雄

王文君は、題名に「商権」を使用して樽本論文を批判した。私がそれに答える。

王文君が問題にするのは、『申報』に見える『繡像小説』の新聞記事、出版広告の詳細についてだ。

問題を整理しながら、説明する。

問題の所在

『繡像小説』の発行が遅延していた。それを資料にもとづいて証明することはできないか。私が1980年代にぶつかった問題のひとつだ。

考えてたどりついたのが、当時の新聞類である。『繡像小説』の受贈記事がある。発行元の商務印書館が宣伝のために雑誌を新聞社に贈呈した。それを受け取ったという感謝記事だ。また、同じく新聞に掲載された商務印書館による出版広告が資料になる。中国の新聞に利用価値があるとは、その頃、誰も気づいていなかった。無理もない。清朝末期の新聞は普通に利用できる状態ではなかった。私が新聞に気づいたのは、その影印本が刊行されはじめたからだ。ゆえに、中国で注目されはじめるのは、ずっとあとになった。

目についた新聞、雑誌の記事を集めて記録した。雑誌では、それ自体の刊行が不確かなばあいがある。『繡像小説』と同じ版元の商務印書館だ。これが発行する『東方雑誌』に掲載された自社刊行物の広告は、おおまかでありあくま

でも参考にしかない。

新聞は、なんといっても毎日刊行される。日付が重要だと理解した。天津『大公報』『申報』などは影印本で、『中外日報』『世界繁華報』などはマイクロフィルムを見る。それらの受贈記事、出版広告を書きとめる。

刊行一覧は、何度も作り直している。そのなかの1本が樽本「《老残遊記》和《文明小史》的關係」の中の「《繡像小説》的出版延期」部分（『清末小説研究集稿』済南・齊魯書社2006.8）「《繡像小説》刊行一覧」（48-53頁）というわけ。

中国では、これくらいしか知られていないかもしれない。だが、私は以前から何度も発言している*1。

それらの資料を総合して考察した結論は、こうだ。

『繡像小説』は、阿英がというような半月刊を維持したわけではない。刊行は徐々に遅延していた。ゆえに、李伯元の死去と同時に『繡像小説』第72期をもって停刊したわけでもない。さらには、主編者李伯元の死去後も雑誌は刊行されていた。これは、必然的に李伯元の作品であるとされてきたいくつか、別人の手になる作品だという事実を導き出す。

王文君は、以上を把握したうえで、『申報』に的を絞って受贈記事、出版広告の掲載状況をくわしく調査した。私は今までこれほど精密な記載を見たことがない。王文君の努力を高く評価する理由である。

王文君の指摘

王文君が指摘することのひとつは、樽本が示したいくつかの例に誤認があるということだ。

『申報』に掲載されていない出版広告2件を記載している、という。新聞を精査した王文君がいうのだから、その指摘は正しいのだろう。ただし、私が説明すれば、なにもないところから記述はできない。見誤ったか。あるいは、実物で確認できない部分については、もとづく資

料がある。それを引用するのが私の方法だ。引用元の間違いなのだろう。誤りだといふのだから、今回は王文君の指摘によって訂正する。

もうひとつは、広告の内容を「贈書」と「専門」に区別していないこと。王文君は、「惠書致謝」という単語を使用する。『繡像小説』第1期を贈呈いただき感謝します、という内容だ。それには作品の評価が書かれていることがある。その史料的価値のある大量の情報を取り逃がした、と批判する。

王文君が指摘する『申報』に掲載された『繡像小説』広告情報は、基本的に正しいと思う。王文君が『申報』調査に努力した点に私は高い評価をあたえる。

『繡像小説』発行遅延問題は、中国においては無視されがちである。最近でも、あいかわらず半月刊を守ったと根拠のないことを述べる著書は多い*2。それらに比較すれば、王文君論文は真摯に問題を取り上げている。

反論する

王文君が行なった詳細な調査は、私の研究に役立つ。それらを受け入れて「『繡像小説』刊行一覧」を作り直した。別に掲げる*3。

王文君論文を読んで、私が首をかしげることがを指摘しよう。

まず、「惠書致謝」に含まれる貴重な情報は、別に利用すべきものである。『繡像小説』刊行遅延説とは直接には結びつかない。

私が記事と広告を区別しないのは、刊行時期そのものに注目しているからだ。有益情報うんと批判すること自体が、的はずれている。

1980年代、張純は、私とこの問題を討論したとき、新聞広告は信頼できない、といった。当時の中国人研究者にはそれくらいの認識しなかった。

出版広告にも2種類がある。

出版予告と出版報告だ。予告は変更される可能性がある。だが、すでに出版しているものに

ついて虚偽の広告をする必要はない。日にちに差があろうとも、基本的に刊行が終了している。出版資料として参考にする価値がある。この考えは今でもかわらない。

受贈記事は、広告の一種であろうとも、これによっても刊行された事実が確認できる。『繡像小説』を受け取って記事になるまで、時間差が生まれることもある。そこを考慮するにしても、基本的に利用できる資料のひとつだ。

私が提出した『申報』の広告時期が、実際のものとは一致しないものがある。そう王文君はいう。

ひとつは、光緒三十二年十月廿七(第65至67期)と光緒三十二年十二月初六(第69期)は『申報』には存在しないと指摘する。そうであれば、結果として『繡像小説』の刊行時期が大きくずれてくるのか。疑問が生じる。

だが、それはない。『中外日報』同年同月二十六日、あるいは『新聞報』同年同月二十七日に第65-67期の記録がある。第69期のほうは、『申報』十一月二十九日に繰り上がる。こちらも『新聞報』の同年同月同日に第67-69期が記録されている。

このように別の新聞を参照すれば、『申報』広告が示すのと同じことを確認することができる。

そのほかも同様だ。いくつかの齟齬があるにしても、それで刊行遅延の時期が大幅にずれることはない。私にいわせれば、誤差の範囲内である。

王文君論文には、致命的な欠陥がある。

『申報』の記事、広告を精密に調査した。それは、すばらしい。だが、調査するために調べている。それがなを目的にする精査であるのかを忘れている。目先の事実拘泥するあまり(悪いといっているのではない)、本来の目標を見失った。

『繡像小説』の刊行は、はたして半月刊が維持されたのか。それを検証するための新聞調査

であったはずだ。

しらみつぶしに調べて得られた情報によって、樽本の結論を覆す結果を得ることができたのか。李伯元の死去以前に『繡像小説』は全72冊を刊行して終了したのか。あるいは、まったく別の見解を提出したのであろうか。もしそうであれば、論文を書く価値がある。新しい発見につながるからだ。しかし、残念ながらそうはならなかった。樽本の結論をすこしも動かすことができないでいる。

私は、『申報』以外に、たとえば『世界繁華報』天津『大公報』『中外日報』『新聞報』『同文滬報』『時報』などを総合する一覧を作成した。それには他文献を参照した箇所がある。それらと照らし合わせて、王文君は今までは異なる結論に到達したのだろうか。それもない。

私が見たところ、1例だけほかとは時期的に相違する広告がある。

「光緒三十二年閏四月初九日 第4版 第55、56期」の新聞記事らしい。『申報』の該号以外には、掲載を見ない。

見ない、といっても刊行一覧にないだけかもしれない。ほかの新聞を丁寧に調べれば、別のものが出てくる可能性もある。

そこを除いては、王文君の詳細な『申報』調査は、他の新聞記事、広告とほぼ重なるというてよい。特別に異なる情報は、ここには見いだすことができない。

私が大きな問題だと思うのは、まさにここに存在する。

注目すべき問題点

光緒三十二年三月十四日、李伯元は死去する。この事実をとりまいて問題がふたつ存在する。ひとつは、李伯元が自分で行なった肺病宣言だ。

死去の約一カ月前、『世界繁華報』同年二月十五日付で李伯元の肺病が宣言された。

刊行一覧によれば、李伯元の肺病宣言以前に



『世界繁華報』光緒三十二年二月十五日付

は、二月初六日に第49-52期が刊行されている。李伯元死後の三月二十四日に第53期が出る。李伯元の死去をはさんで約一ヵ月半の刊行空白期間がある。この明白な事実をどう考えるか。

もうひとつは、李伯元死去後に第53期から第72期までが同年年末にかけて刊行されたことだ。

李伯元は死後に原稿を書いたか、という当然すぎる問題が発生すると何度も説明している。

李伯元は原稿を書きためていた。未発表の原稿を持っていた。そういう意見が出されたことがある。その意図は、李伯元死去後の作品も彼自身の筆になるといいたいらしい。21世紀になる前後だから古い。私にいわせれば、俗説にすぎない。誰もが考えつくりやすい。それにはもともと何の根拠もないのだ。

李伯元の肺病宣言はどうなのか。私が発掘した。写真も掲載して説明した(2003)。だが、それに言及した研究者はいない。重要資料の存在を知らない、見逃した、あるいは無視している。そのあげくが、なんとなく李伯元は原稿を書きためていたのだろう、と誤った推測をするだけだ。

肺病宣言は、一切の社交を謝絶するほど李伯元の体力が衰えていたことを示す。そう理解するのが普通だろう。『繡像小説』刊行に遅延が生じるようになった原因のひとつではないか。

もしも、李伯元に書きためた原稿があったならば、彼の肺病宣言前後、およびその死後において『繡像小説』の刊行に空白が生じることはなかったはずだ。李伯元の未発表原稿はなかった。だからこそ『繡像小説』が発行されなかった期間が生じた。素直に考えればそうなる。

『繡像小説』は李伯元の死去後しばらく、数回の空白期間をにおいて第72期でようやく終刊する。推定光緒三十二年十二月だ。李伯元の筆名南亭亭長、あるいは謳歌変俗人名で発表された作品は、李伯元のものではない。彼の協力者歐陽鉅源の代作であろう。これが私の従来からの主張だ。

私はつぎのことを王文君に期待する。『申報』以外の新聞に目を配り、以上の問題が存在することを視野に入れて、精密詳細な調査を続行してほしい。

その結果、王文君が新しい見解を提出するならば、私は大いに歓迎する。 罇

【注】

1) 以下の樽本論文で言及した。

「李伯元は死後も『繡像小説』を編集したか」

『清末小説から』第64号 2002.1.1、1-12頁。要約：『繡像小説』全72期は、李伯元の死去と同時に停刊した。これが、中国の学界における定説である。ひとつの例外もなく、長年にわたってくりかえしそう主張されてきた。これに対して、異議を唱えたのは、中国では張純であり、日本では樽本照雄である。昨日今日、新しく異議がとなえられたというわけではない。しかし、『繡像小説』発行遅延説は、中国の研究者が認めるものとはなっていない。研究者が認めなくとも、事実が存在する。『繡像小説』第13期より発行年月を記載しなくなる。当時の新聞『中外日報』『申報』に掲載された『繡像小説』に関する出版広告を丹念に拾っていけば、あきらかに発行が遅れていることがわかる。きわめつけは、李伯元が死去した光緒三十二年三月十四日以降も、『繡像小説』第53期よりあとの号が発行されている事実があることだ。同年十二月にようやく全72冊の刊行終

了が宣言された。『繡像小説』の発行遅延は、それだけにとどまらない。李伯元の作品であるとされている「文明小史」「活地獄」「醒世縁彈詞」のかわり部分は、李伯元の死後の発表となるのだ。にわかに「偽作」説が登場する。従来の自説を、『中外日報』『申報』の出版広告を追加し、あらためて検証した。

「李伯元の肺病宣言 『繡像小説』発行遅延に関連して」『清末小説から』第69号 2003.4.1、1-13頁。要約：李伯元の死因は肺結核であることは定説になっている。主として友人の証言による。李伯元自身が、光緒三十二年二月十五日付『世界繁華報』に広告文を掲載し、みずからが肺病であること、招宴を断わる宣言をしている事実を発見した。新出資料である。李伯元が肺病であったことの確証となるばかりか、『繡像小説』の刊行が遅れていた事実と関連するから、さらに資料的価値がます。すなわち、李伯元の肺病は、彼の死因となっておりと同時に『繡像小説』の恒常的発行遅延の原因だということになるからだ。

「『繡像小説』研究の現在」『清末小説から』第89号 2008.4.1、1-8頁。要約：『繡像小説』にはみつつの問題がある。編者は誰か、また李伯元と劉鉄雲の盗用問題、および発行遅延問題である。私は、問題点3件について独自の解答を提出している。だが、中国ではそれらについて長らく放置したまま追跡調査を行っていない。ようやく文迎霞「關於《繡像小説》的刊行、停刊和編者」（『華東師範大学学报（哲学社会科学版）』第38卷第3期2006.5.15）が公表された。編者問題については、李伯元であることを新聞の広告を示して確認している。新聞を資料として利用するという私の方法を援用すれば、同じ結論に到着するのは当然だ。おなじく発行遅延についても新聞広告を根拠にして私の解答に近い。ただし、より緻密な推測を提示する。それは、よい。残念なことに、刊行遅延から必然的に生じる盗用問題については、言及をしていない。文迎霞の今後の論考を期待する理由である。

「（『清末小説研究ガイド2008』）第1部蟻の穴から 私の清末小説研究」『清末小説研究ガイド2008』清末小説研究会2008.6.1 清末小説研究資料

叢書11、7-48頁。要約：私の清末小説研究を振り返り、研究論文が成立する条件について述べる。論文には「新しい発見」がなくてはならない。それを実行したのが、私の清末小説研究だった。取り組んだ課題を例にあげ、それが定説をくつがえす結果になった経過を紹介する。同時に、中国の研究界がどのような状況にあるのかも考えることになった。小説雑誌目録の作成/天津日日新聞版『老残遊記二集』の発掘から難問解決へ/『繡像小説』編者問題/『繡像小説』発行遅延説/「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題/『増注官場現形記』の発掘/「官場現形記」裁判/『庚子蕊宮花選』の発掘/吳趸人「電術奇談」の原作探索/細かいことをいくつか/商務印書館と金港堂の合併問題/林紓冤罪事件

「『老残遊記』執筆経過の謎2完 書簡集『滄榕書札』に見る」『清末小説から』第94号 2009.7.1、1-12頁。要約：劉厚沢と蕙孫兄弟は、「老残遊記」初集が『天津日日新聞』に連載されたのは1904年であるという阿英の誤った断定を前提にして考えている。出発点が間違っているから「老残遊記」執筆過程がどうなっているのか正しく理解することは不可能であった。魏紹昌から提出された執筆過程についての質問に答えることができないのも当然だ。一方の魏紹昌自身も、阿英説を信じていたから解答に到達することができなかった。後年、樽本が正しい答えを提出した。魏は知らぬ顔をして阿英説に根拠がないと書いたのだった。より大きな問題とは、こうだ。「文明小史」が「老残遊記」から盗用していること。それに掲載誌である『繡像小説』の発行遅延問題がからむ。編集長だった李伯元が死去したあとも『繡像小説』は発行を継続していた。李伯元の死後に発表された「文明小史」は、李の作品ではない。彼の協力者であった歐陽鉅源が執筆したとしか考えられない。「文明小史」の著者問題に発展するのだ。

「（『商務印書館研究文献目録』）『繡像小説』問題はどうか論じられているか」『商務印書館研究文献目録』清末小説研究会2010.6.1 清末小説研究資料叢書13、38-55頁。要約：『繡像小説』については編者、発行遅延、盗用の問題が存在する。研究者は、それらの問題をどのあたりまで把握しているの

か。李伯元研究から、張仕英と王学鈞の著作を取り上げて検討する。『繡像小説』研究からは、王燕と郭浩帆の論文をとりあげる。さらには、文迎霞、汪家榕の論文も視野に入れて評価一覧表を作成した。

「『繡像小説』問題2」『清末小説から』第99号 2010.10.1、1-6頁。要約：『繡像小説』問題とは、編者、発行遅延、さらに「老残遊記」と「文明小史」の盗用問題である。主編者が李伯元であったときに、「老残遊記」の没書事件が発生した。ところが、その没書になったはずの内容が「文明小史」に盗用されている。では、盗用したのは李伯元だったのか。これに『繡像小説』の発行遅延という事実がからむので問題が複雑になる。事實は、李伯元の死去後に問題の「文明小史」第59回が発表されているのだった。死者が原稿を書くことはできない。李伯元にかかわる人物がいたはずだ。それは歐陽鉅源であるというのが従来からの私の主張である。盗用問題について、もういちどその経過を整理しなおした。

2) たとえば、以下のものがある。

祝均甫『函鑑百年文献 晚清民国年間期刊源流 特点探求』台湾・華藝學術出版社2012.12

32頁「1906年4月停刊」とある。

任翔、高媛主編『中国偵探小説理論資料(1902-2011)』北京師範大学出版社2013.3

582頁『繡像小説』の停刊時期を「1906.4」と誤る。

袁進主編『中国近代文学編年史：以文学広告為中心(1872-1914)』北京大学出版社2013.5

周羽「『繡像小説』的貢獻」121頁「1906年停刊」とし、刊行月を明記しない。発行遅延問題を視野にいれて用心深く記述を避けた、と私は推測した。

周羽「『老残遊記』的藝術成就」(278頁)ところが、その同じ周羽が、「老残遊記」の『繡像小説』連載について説明する。開始は該誌第9期で新暦を使用し1903年9月21日とする。第12期以前には刊年が印刷されている。「八月初一日」は、9月21日であり、ところが、つぎに奇妙なことを書く。連載が中断した第18期には、刊年は記載されない。それを周羽は、「当年旧曆十二月」と表記している。これは半月刊が維持されたばあいの推測でしかない。周羽も発行遅延説には懐疑的であることがわかる。

狄霞晨「李伯元文学創作与廣告」137頁『繡像小説』第56期1905年7月と誤る。新暦旧暦混用だ。第72期1906年4月と誤る。こちらは新暦のみ。

闕文文『晚清報刊上の翻譯小説』濟南・齊魯書社2013.5

13頁「1903.5～1906.4」とする。終刊時期は、従来通りの誤り。

3) 以下の文献を参照した。

文迎霞「關於《繡像小説》的刊行、停刊和編者」『華東師範大學學報(哲学社会科学版)』第38卷第3期2006.5

陳大康「晚清《新聞報》与小説相關編年(1903-1905)」『明清小説研究』2007年第2、3期(總第84、85期) 2007発行月日不記

陳大康「中国近代小説史料 《繡像小説》中小説史料編年」『文学遺産 網絡版』劉霞によると2010.4.5(未確認) 電字版 『新聞報』廣告を主として採録する

劉霞「關於《文明小史》的刊行時間」『現代語文』2012年第1期(總第454期)2012.1.5

樂偉平「夏曾佑、張元濟与商務印書館的小説因緣拾遺 《繡像小説》創辦前後張元濟致夏曾佑信札八封」(『中国現代文学研究叢刊』2014年第1期(總第174期)2014.1.15)。引用して四月朔「商務館現求助於繁華報館主人李伯元，其筆墨亦平淺，然此外更無人」

*印 王文君「就《申報》刊《繡像小説》廣告與樽本照雄先生商榷」『清末小説から』第114号 2014.7.1 注：刊行一覧に「光緒三十三年五月初一日 第4版 第72期」は記載していない

青色印 第1年24期 第2年48期 第3年72期 の実際の完結刊年

黄色印 注意すべき事項

『繡像小説』刊行一覧」は次に

徐兆璋日記中的近代小說與出版史料 3 完

——以小說林社為中心

樂 偉平 選註

五月十四日(7月5日), 陰, 夜微雨。

閱《女媧石》甲乙二卷,《海外天》¹一卷,《虛無黨》一卷,《玉蟲緣》²一卷,《新蝶夢》一卷。《女媧石》, 中國人自著小說也, 女權發達, 世界終有此一日耳。

五月望日(7月6日), 乍陰乍晴。

閱《狸奴角》³一卷,《一捻紅》⁴一卷,《俠

¹《海外天》, 英國馬斯他孟立特原著, 東海覺我譯, 海虞圖書館光緒二十九年(1903年)五月初版, 後版權贈予小說林社。此書的小說林社初版本, 約在乙巳年末, 筆者未見, 再版于丁未十一月。該書第一回後的譯者按語稱: “日本櫻井鳴村君由英文譯為日文, 名曰《絕島奇譚》, 此編又由日本文重譯者也。” 據此, 筆者推斷, 該書由徐念慈自日文翻譯, 且底本為櫻井鳴村譯《絕島奇譚》, 日本東京: 博文館, 1902年版。另據樽本照雄《清末民初小說目錄》(第5版) H0248條, 該書的原作是 Captain Frederick Marryat, *Masterman Ready; Or, the Wreck of the Pacific*, 1878。

²《玉蟲緣》, 美國安介坡著, 會稽碧羅(即周作人)譯述, 常熟初我潤辭。乙巳五月初版。據《中國近代文學大系·翻譯文學集二》633頁, 底本是 Edgar Allan Poe, *Golden Bug*。《中國近代文學大系·翻譯文學集二》, 上海: 上海書店出版社, 1991年。

³《狸奴角》, 果盤著, 飯囊譯, 乙巳十一月再版。

⁴《一捻紅》, 吳門天笑生譯, 丙午正月初版。底本為江見水蔭、關戶浩園合著的《女の顔切》, 日本青木嵩

奴血》⁵一卷,《車中美人》⁶一卷。

五月十六日(7月7日), 陰, 昨夜四鼓時大雨。

讀《自由結婚》一二編二卷,《枯樹花》二卷,《俠男兒》一卷,《離魂病》一卷。《自由結婚》、《枯樹花》皆自撰, 非譯本。

五月十七日(7月8日), 陰, 午後大雨, 更許始止。

唐海平初八日函云: “……近譯《噫無情》一書, 業已告竣, 約明後日問東京刷印所講價付刊。已托小說林登報。敝鎮親友來東遊學者已得五人, 傑往來招待, 費用間時不少, 致將《俚諺集》擱起。《女醫者》亦已譯出, 並倩人將稿謄清, 無奈刊費甚大, 無力付印, 實為恨事。”

五月十八日(7月9日), 晴, 又熱。

與唐海平書云: “……《女醫者》是否小說? 望將書中大旨略述一二, 並計字數若干, 可以代為設法。”

五月二十五日(7月16日), 陰涼, 午後雨, 時下時止。

(讀)《冶工佚事》一卷,《血手印》一卷。此二書皆文明書局所出版, 文明所譯小說, 其版大小不一, 不及商務印書館、小說林之為叢書體, 羅列書目, 便於購讀也。

五月二十六日(7月17日), 陰, 時雨時止, 天氣亦驟涼。

與孫希孟書云: “《雁來紅》第一期已閱, 第二期以下足下能覓寄否? 該款回里面繳。”

六月初二日(7月22日)陰, 午後雨, 天燥熱不可耐。

讀《鬪體杯》⁷三卷。

山堂明治二十八年(1895)版。

⁵《俠奴血》, 乙巳十一月初版, 法國囂俄原著, 天笑譯。據樽本照雄《清末民初小說目錄》(第5版) X0349條, 該書的原作是 Victor Hugo, *Bug-Jargal*, 1826。

⁶《車中美人》, 社員譯述, 乙巳十一月初版。

⁷《鬪體杯》, 英國檣陵著, 元和奚若譯。上卷、中卷, 丙午四月初版, 下卷丙午閏四月初版。

六月初三日(7月23日), 乍晴乍陰, 午後雨, 夜大雨。

讀《女獄花》一卷, 此書西湖女士王妙如著, 雖思力甚新, 而薄弱不能動目, 此近日自著新小說之通病也。《秘密電光艇》一卷, 此即《新舞臺》中之一節, 譯筆似較《新舞臺》為勝。

六月初五日(7月25日), 晴, 天稍熱, 夜又雷雨, 更許止。

近時小說日出不窮, 其思想之奇辟, 佐我腦力不淺, 然亦全在譯筆之佳與否。倘譯筆平常, 便味同嚼蠟矣。

六月初六日(7月26日), 晴燥。

《禽海石》為言情小說之佳者, 然涉於誨淫, 不及西人之雅馴也。《多少頭顱》名為譯本, 實則演揚州十日故事, 而託名為波蘭耳。《恨海春秋》一卷, 《雙碑記》一卷, 《穀間鶯》一卷, 《未來戰國志》一卷。此四書皆前數年出版, 似不及近日之精采。天衍進化, 於譯事似亦有影響也。所不解者, 近二年所出小說多偵探、言情二類, 而於社會風俗毫無觀感, 不能不歎為美猶有憾也。

六月十二日(8月1日), 晴, 午後陰, 作勢欲雨而不果。炎威較昨日稍退, 而煩躁如故。

(閱)《孟恪孫奇遇記》一卷, 《新法螺先生譚》⁸一卷。《法螺先生》與《奇遇記》大同小異, 未知何者為重疊。《黑行星》⁹一卷, 此科學小說之足警動沉迷者, 較《世界末日記》更有理想。

六月十三日(8月2日), 晴。

閱《日本劍》¹⁰二卷, 《萬里鴛》¹¹三卷, 《地心旅行》一卷。

六月望日(8月4日), 晴。

閱《秘密隧道》¹²二卷, 《一束緣》一卷, 《蠻荒志異》二卷, 《鴻巢記》¹³一卷。

六月十七日(8月6日), 陰涼有秋意。

閱《銀山女王》¹⁴二卷卷上、中。

六月二十三日(8月12日), 竟日雨。

孫希孟十一日函云: “……《雁來紅》四冊寄奉, 忠宣¹⁵一疏即盼鈔惠。比日搜考, 得東澗¹⁶事蹟, 已錄成一大冊, 明季服飾、器玩亦得數十條, 皆《繡林記》¹⁷中資料也。”

……閱長州呆道人《風洞山傳奇》¹⁸二卷。

¹⁰ 《日本劍》，英國屈來珊魯意著，沈伯甫譯意，黃摩西潤詞。上卷乙巳五月初版，下卷丙午二月初版。

¹¹ 《萬里鴛》，英國婆斯勃原著，洞庭吳步雲譯，卷上乙巳六月初版，卷中乙巳十一月初版，卷下乙巳十一月初版。

¹² 《秘密隧道》，英國和米(Hume)著，元和吳若譯。上卷丙午四月初版，下卷丙午閏四月初版。

¹³ 《鴻巢記》，酒瓶著，飯囊譯。丙午二月初版。

¹⁴ 《銀山女王》，日本押川春浪撰，摩西譯補。上卷乙巳四月初版，中卷乙巳六月初版。底本為押川春浪《銀山王》，日本東京：博文館，1903年版。

¹⁵ 瞿式耜(1590-1650)，字起田，又字伯略，號稼軒，江蘇常熟人。萬曆四十四年(1616)進士，官至戶科給事中，晚年參加抗清活動，擁立桂王朱由榔為永曆帝，後城破被捕，死于順治四年(1650年)。乾隆四十一年(1776年)，追諡“忠宣”，著有《瞿忠宣公集》等。

¹⁶ 錢謙益(1582-1664)，字受之，號牧齋，晚年號蒙叟、東澗遺老，江蘇常熟人，明萬曆三十八年(1610)進士，在明朝官至翰林院侍讀學士、禮部侍郎，又曾在南明弘光朝中任禮部尚書。順治二年(1645)降清。

¹⁷ 《雁來紅叢報》第六期廣告《雁來紅叢報書目略》的《新編小說》條目下，列有《海隅繡林記》。筆者認為，文中提到的《繡林記》，即孫景賢準備寫的小說《海隅繡林記》，該小說筆者未見，可能沒有出版。因上文提到的瞿式耜、錢謙益都是常熟人，該小說應與常熟先賢有關。

¹⁸ 《風洞山傳奇》，長洲呆道人(吳梅)著，丙午年四月

⁸ 《法螺先生譚》、《法螺先生續譚》，吳門天笑生譯，乙巳六月初版(與徐念慈所著的《新法螺》合訂，徐兆璋說的《新法螺先生譚》，指的是包天笑的譯本)。

⁹ 《黑行星》，西蒙紐加武著，東海覺我譯述，乙巳七月初版。該書的原作是 Simon Newcomb, *The End of the World*，日本黑岩淚香譯為《暗黑星》，先在1904年5月的《萬朝報》上連載，同年由日本朝報社出版單行本。徐念慈自日文翻譯。

七月初六日(8月25日),陰雨,頓涼如深秋時,午後霽。

閱《雁來紅叢報》五冊一期至五期。

七月初十日(8月29日),晨聞雨聲浙瀝,天氣涼甚,午稍霽。

與孫希孟書云:“兩書均收到,集句亦照改,惟汪袞甫¹⁹以其詩有忌諱,不肯付梓。予勸用別號,而袞甫又不願,此與孟朴不肯印《雁來紅》同一通人之蔽也。倘袞甫決行此意,虹當攜至滬上印行,雲甌亦同虹意也。付梓之議,袞所創也。彼甚珍惜其詩,急欲表襮,而又恐盛名之下,或有鬼蜮,以是集矢於彼者,事固難料。若吾輩泯泯無聞,則彈射所不及,大可言論自由,可見名之一字有時而為患也。《雁來紅》六期起,如已續出,望仍購寄。”

七月二十四日(9月12日),晴。

讀《海天嘯傳奇》²⁰一卷。

七月二十八日(9月16日),晴。

讀《身毒叛亂記》²¹二卷卷上、中。

八月初四日(9月21日),乍陰乍晴。

讀《秘密海島》²²一卷卷下,《馬丁休脫偵探案》²³二卷一、二、三案,八、九、十、十一案,《深

初版。

¹⁹ 汪榮寶(1878-1933),字袞甫,號太玄,江蘇元和(今屬蘇州)人。1897年丁酉科拔貢,1900年,入南洋公學,1903年留學日本,入早稻田大學。1906年任京師譯學館教習,入民國後,曾任駐比利時、瑞士、日本公使等職。著有《清史講義》、《思玄堂詩集》等書。

²⁰ 《海天嘯傳奇》,江陰劉鈺步洲甫著,乙巳十二月初版。

²¹ 《身毒叛亂記》,英國麥度克原著,吳門礪溪子(楊紫驎)、天笑生同譯。上卷丙午年四月初版,中卷丙午年閏四月初版。

²² 《秘密海島》,法國焦士威奴著,元和奚若譯述,武進蔣維喬潤詞。上卷乙巳四月初版,中卷乙巳五月初版,下卷乙巳十一月初版。據樽本照雄《清末民初小説目錄》(第5版)M1060條,該書的原作是 Jules Verne, *L'île Mystérieuse*, 1874。

²³ 《馬丁休脫偵探案》,英國瑪利孫原著,元和奚若譯。第一冊(一、二、三案)乙巳十二月初版,第二冊(四、

淺印》²⁴一卷。

九月初一日(10月18日),晴,風大而無浪。

訪曾孟朴于小説林印刷所,朱遠生、徐念慈皆在。孟樸邀至一品香夜膳,復至小説林小坐,十下鐘始歸寢。

九月二十八日(11月14日),晴。

晤芝孫後至小説林印刷所,與孟樸暢談,雙南亦來。夜與雙南、徐念慈小飲。……予未攜鋪蓋,即借住小説林。萍蹤無定,予之謂矣。孟朴因小説林結帳事,談簿計學甚詳,以詞章專家而役役於簿書,可謂勇於改轍矣。小説林頗獲利,去年每千贏四百多,今年每千贏三百多云。

十月十七日(12月2日),天陰多風。

至海虞圖書館,與芝孫、孟朴長談。

十二月十二日(1907年1月25日),陰。

與翥叔函云:“……丁初我新輯《理學雜誌》²⁵,任意俟到東後稍加研究,或任翻譯,為人為己均有益也。”

十二月二十七日(1907年2月9日),微雨。

張雙南已下鄉,留函云:“黃崖案足下所聞近事,望詳為開示²⁶。尊處有小種孤本,並祈檢出數種,新正到申,擬即彙刊。”

五、六、七案)丙午年二月初版,第三冊(八、九、十、十一案)丙午年三月初版。徐兆璋看到的是第一、三冊。據樽本照雄《清末民初小説目錄》(第5版)M0032條,底本是英国 Arthur Morrison 著 *Martin Hewitt* 系列小説。

²⁴ 《深淺印》,華生筆記,鴛水不因人譯述,丙午五月初版。據樽本照雄《清末民初小説目錄》(第5版)S0844條,該書為贗作,非 Arthur Conan Doyle 作品。

²⁵ 《理學雜誌》,創刊於丙午十一月十五日(1906年12月30日),共出六期,于丁未八月(1907年9—10月)停刊。該雜誌由小説林宏文館有限合資會社發行,發行人是丁祖蔭,編輯者是薛鳳昌。

²⁶ 《雁來紅》雜誌第九、十期刊登了《黃崖教匪獄》的文章,在《大獄記》的總題目之下。

丁未日記 光緒三十三年(1907)

二月初四日(3月17日),晴,微風。

夜十二點鐘抵長崎,泊口外。

四月十日,陽曆五月二十一號,晴。

寄王采南一書,托其寄宏文館《法律大辭典》樣本一閱。

四月廿四日,陽曆六月四號,陰。

得王采南十七日書,言《法律辭典》已代定五分,並寄樣本來。即上野貞正之所著,依原文譯出者,辭多而寡要,非善本也。

四月廿五日,陽曆六月五號,陰,下午雨。

張雙南昨寄來《小說林》上月二冊,中有《孽海花》四回,兩日閱畢。

四月廿八日,陽曆六月八號,晴,熱。

得張映南十九日函言:“今年《太陽》報乞速定一分寄下,早稻田《維多利亞傳》又名《英國之女皇》,其下冊如有,亦望購寄。如有新出小説如《新舞臺》、《秘密電光艇》等多文言而少俗語者,亦望購寄。”

六月十八日,陽曆七月二十七日,晴熱。

(閱)《小說林》第三冊。

六月二十四日,晴熱,陽曆八月二日。

孫希孟二十日函云:“……《雁來紅》十期後即止印。”

七月初四日,陽曆八月十二日,晴。

閱《小說林》第四冊。

七月十四日,陽曆八月二十二日,晴。

孫希孟函寄《雁來紅》九、十期,索汪詩。

七月十六日,陽曆八月二十四日,陰雨,天頓涼。

閱《冷眼觀》²⁷二卷,《黃金世界》²⁸一冊。

七月二十日,陽曆八月二十八日,晴。

至市前購小説數種。

七月二十一日,陽曆八月二十九日,陰雨。

讀《飛行記》²⁹一冊,《棄兒奇冤》³⁰一冊。

八月初九日,晴,陽曆九月十六日。

張雙南初四日寄丁芝孫書,言小説林印刷甚發達,《佚叢》第二種尚未開印,稿則早齊矣³¹。

八月廿三日,晴,九月三十號。

讀《小說林》第五期一冊。

九月二十二日,東曆十月二十八日,晴。

在春日丸閱《懸崖馬》³²二冊,《黃鉛筆》³³二冊。

九月三十日,東曆十一月五日,雨稍止。

與王夢良一書,言前日還款七十五元,寄

²⁹ 《非洲內地飛行記》,英蕭爾斯勃內原著,常州謝炳譯。丁未五月初版。據樽本照雄《清末民初小說目録》(第5版)F0332條,該書的原作是 Jules Verne, *Cinq Semaines En Ballon*。據筆者考證,《非洲內地飛行記》係從日文譯出,底本是《亞非利加內地三十五日間空中旅行》,井上勤譯,渡辺義方校,東京:繪入自由出版社,1884年版。

³⁰ 《棄兒奇冤》,美國老斯路斯著,滄海漁郎、延陵伯子同譯。丁未五月初版。

³¹ 丁未八月十五日(1907年9月22日)《時報》廣告《小説林第五期出版》“……寄售《佚叢》,已出《牧齋集外詩》二種,《柳如是詩》二種,精裝一冊,價洋二角。總發行所:棋盤街小説林宏文館。”據《中國叢書綜録》,《佚叢甲集》,清光緒三十三年(1907年)張南誠(張繼良)排印本,子目:牧齋集外詩一卷補一卷,(清)錢謙益撰;柳如是詩一卷,(清)柳如是撰;龍川先生詩鈔一卷,(清)李清峯撰;素蘭集二卷補遺一卷,(明)翁孺安撰。這些都是常熟文獻。應該是張繼良編《雁來紅叢報》的一個副產品。

³² 《懸崖馬》上下卷,英麥去麥脫著,吳郡盧達譯,丁未八月初版。該書筆者只見到上冊,無版權頁,出版日期據《小説林書目》與《丁未年小説界發行書目調查表》。

³³ 《黃鉛筆》上下卷,英斐立潑斯著,無錫章仲謐、章季偉同譯。光緒三十三年(1907)八月初版。據樽本照雄《清末民初小說目録》(第5版)H2338條,底本是 Edward Phillips Oppenheim, *The Yellow Crayon*。

²⁷ 《冷眼觀》,八寶王郎(即王靜莊)著,第一冊丁未六月初版,第二冊丁未八月初版,第三冊戊申三月初版。

²⁸ 《黃金世界》,碧荷館主人著,丁未六月初版。

存小説林發行所事。

十月初三日，晴，東曆十一月八日。

與孫師鄭³⁴書云：“不通音問久矣。弟自六月初歸國，外懼於炎威，內耽于小説，杜門謝客者二月有餘。”

十月二十一日，東曆十一月二十六日，晴。

為海平作徐念慈一書，詢商務印書館是否收稿，欲開譯《法律大辭典》也。

十月二十四日，東曆十一月二十九日，陰雨。

與丁芝孫書云：“……前日購得新出版小説二種，《地下戰爭》一冊，《電力艦隊》一冊，郵呈清覽，希即驗收。”

丁未十一月初八日，晴，午後陰，東曆十二月十二日，旋霽。

王夢良十月廿九日函云：小説林前月開周年會，統核虧耗四五千，頗有來日大難之勢。

十一月二十一日，晴。東曆十二月廿五日，較昨日稍暖。

與徐念慈書，詢前《法律大辭典》一書欲售譯稿，有無復音。又海平、一帆³⁵所譯《手工教科書》³⁶擬寄商務印書館代售，亦托念慈紹介，書交荊才攜交。

十二月初十日，晴，東曆一月十三日。

與徐念慈郵片，詢前函久未得復事。

³⁴ 孫雄(1866-1935)，民國藏書家、文學家。江蘇昭文(今常熟)人，原名同康，字師鄭，號鄭齋。後改名孫雄，晚號鑄翁、味辛老人、詩史閣主人，光緒二十年(1894)進士，官吏部主事，京師大學堂文科監督等職，撰《師鄭堂集》、《眉韻樓詩話》、《舊京文存》等，輯有《道咸同光四朝詩史》。

³⁵ 馮國鑫(1883-1920)，江蘇常熟人，字一帆，號靈南。同盟會會員，南社成員。1901年庠生。1909年日本政法大学畢業，回國後授法科舉人，考取內閣中書，入大理院學習推事，後任武進縣檢察廳長、江蘇省高等分廳監督檢查官等職。

³⁶ 《手工教科書》，唐人傑，馮國鑫譯，日本東京：灿文社，1906年版。

十二月二十日，陰，東曆一月二十三日

徐念慈十二日函言，“《手工教科書》，商務刻已復譯，將近出版；寄售一節，殊難辦到。《法律辭典》因海上法律書銷場大壞，亦無成議；而他處又以資本絕巨，不肯冒險。”

戊申日記 光緒三十四年(1908年)

戊申正月朔日，東曆二月二日，晴，午後陰。

翥叔十九日函云：“孟朴欲正《黃車掌錄》，望檢出。”

戊申正月四日，東曆二月五日，晨雨雪，天驟冷，午後霽。

與翥叔函云：“……孟公欲《黃車掌錄》，但此稿須回家後編纂，現複雜，別人不易整理，乞轉告之。”

四月初八日(5月7日)。

下午晤王夢良于小説林編輯所，曾孟樸亦在。又攜夢良至圖書公司編輯所，晤徐念慈、劉琴孫，即以胡君黼托詢沈信卿³⁷圖書公司是否收譯稿事托之。

五月十一日，(6月9日)，陰，微雨。

下午，至海虞圖書館，問芝孫尚未出。予攜翥叔至一壺春啜茗，芝孫亦來。偕回至圖書館，予購小説數種。

五月十三日(6月11日)，陰。

晨，至海虞圖書館購小説數種。

五月二十一日(6月19日)，乍陰乍晴。

³⁷ 沈恩孚(1864-1949)，中國近、現代教育家，同濟大學第四任校長。字信卿，江蘇吳縣人。1891年肄業於上海龍門書院。1904年去日本考察教育。1905年，龍門初級師範學校成立，為首任監督。1906年，任中國圖書公司總編輯。後在上海發起成立江蘇學務總會，並任會長。1917年，與黃炎培共同發起中華教育職業社。1924年創立甲子社，後擴充為上海鴻英圖書館。1941年，日軍侵佔上海租界時，拒任偽職。

閱小説林所刊《劍膽琴心錄》³⁸一冊。

五月二十八日(6月26日),陰,微雨。

閱小説林所刊小説《遺囑》³⁹一冊。

五月三十日(6月28日),陰雨。

閱小説林所刊小説《紅閨鏡》⁴⁰一冊。

六月十三日(7月11日),晨起天陰晦,未幾雷電以雨,午刻始止。

與鄒仲寬⁴¹(上海棋盤街小説林發行所)書,托寄《國粹學報》、《月月小説》數種。

六月十七日(7月15日),晴。柱礎較爽,未知雨勢能截止否。

與張映南書云:“……孟朴已為陶齋⁴²入幕之賓,不似前此之抑塞矣。”

六月二十日(7月18日),陰晦,稍露陽光,天氣亦轉熱。

聞徐念慈下世,不禁喟息,吾鄉人才又弱一個矣。

六月二十五日(7月23日),晴杲,炎暑益甚。

與丁芝孫書云:“……念慈遽逝,吾黨又弱

一個矣。刻得唐君海平來函,附寄怪奇小説兩種,欲紹介於小説林,未知滬上現由何人主任,伏祈足下代為通郵。如可選登,譯費不計。惟希早日示覆,以免懸盼耳。”

六月二十一日(7月19日),陰晦竟日。

唐海平十六日函云:“茲附呈怪奇小説二篇,懇為刪削潤飾,介紹于小説林,譯費不計。……海平所譯之小説:一《活地獄》,二《狸奴怪》,皆美人阿蘭博著。”

六月二十八日(7月26日),乍晴乍陰,微雨即止,天熱甚。

丁芝孫函云:“手簡誦悉,念公遽卒,孟公北行,社中收稿無人主持。如可待至一月外者,則暫存敝處,否則即行寄還。”

七月初九日(8月5日),晴。

至虛廓村,赴徐念慈追悼會,到者頗眾,挽聯亦多,苦無佳者。天熱甚,勉強成禮。

七月初十日(8月6日),晴。

晨,寫致唐海平一書,言小説稿留芝孫處。

十月二十日(11月13日),晴。

與丁芝孫書云:“前寄短篇小説二種,小説林想不收稿,望便中交翰叔⁴³或翥叔轉寄唐海平,庶無遺失。”

十一月十三日(12月6日),晴。

至一書攤,購得林樂知、沈匏隱同譯《奇言廣記》三卷,即近時所行之《孟恪孫奇遇記》也,當時已有譯本,可見博覽之難。

書與海平,所譯小説售與商務,易五十翼。現擬再譯《肉彈》日俄戰爭小説,明年自印。

³⁸ 《劍膽琴心錄》, 硯端原著, 斯人譯。光緒三十四年(1908)三月初版。

³⁹ 《遺囑》, 英國華登原著, 光緒三十四年(1908)正月初版。

⁴⁰ 《紅閨鏡》, 美國史德蘭原著, 吳門華兮譯。光緒三十四年(1908年)正月初版。原書封面標明其底本為Tenton R. Stanley, *In Folly's Fetters or The Berils of A Secret Maggiage*。

⁴¹ 1906年7月6日, 上海書業商會主辦的《圖書月報》出版。陸費逵主編。共出三期。第二期載有當年入會會員22家, 其中小説林社的代表就是鄒仲寬。參見

<http://www.shtong.gov.cn/node2/node2245/node4521/node29047/userobject1ai54449.html>。

⁴² 端方(1861-1911), 清末大臣, 金石學家。托忒克氏, 字午橋, 號陶齋, 滿洲正白旗人。光緒八年(1882年)中舉人, 歷督湖廣、兩江、閩浙, 宣統元年調直隸總督, 後被彈劾罷官。宣統三年起為川漢、粵漢鐵路督辦, 入川鎮壓保路運動, 為起義新軍所殺。諡忠敏。著有《陶齋吉金錄》、《端忠敏公奏稿》等。

⁴³ 徐鳳書(1871-1952), 字翰青, 晚年自號虞靈老人, 常熟何市人。1896年生員。1902年, 與張鴻等人接辦宗仰上人經營的《商務日報》, 並在商務日報館址成立東亞譯書會, 出版有《政學報》(主編張鴻)。民國成立後, 致力於常熟的教育和公益事業。著有《鋒鏑餘生記》, 《七十自述詩》, 與唐人傑合譯《破天荒》、《模範町村》兩種小説。

虹隱樓日記 宣統元年(1909年)

閏二月二十七日(4月17日), 陰。

(林紓)于近日小説家推老殘、孟樸二君。老殘人謂是劉鐵雲, 不知確否? 其實以《老殘遊記》與《孽海花》比較, 《孽海花》尤勝也。唐蔚芝亦推重《孽海花》, 而以戛然中止為憾事。

六月初三日(7月19日), 陰, 乍霽, 甚熱。

昨, 林琴南寄小説一冊與孫師鄭, 托其轉贈曾孟樸, 系英國名家倭利物古爾斯密著, 名《囹圄春光》。商務印書館以已經復譯, 欲以賤值轉售, 而琴南不欲, 故以贈孟樸。燈下讀一過, 筆墨簡潔, 故自勝人。 罍

国的説論研究 陳福康『中国説学理論史稿』上海外語教育出版社2000.6

蘇 世軍 (『中国近代報刊史』) 訳序: 千古文章未盡才 (美) 白瑞華 (ROSWELL SESSOMS BRITTON) 著、蘇世軍訳 『中国近代報刊史』北京・中央編訳出版者2013.12

黃 雪蕾 跨文化行旅, 跨媒介翻譯: 從《林恩東鎮》(East Lynne) 到《空谷蘭》, 1861-1935 『清華中文學報』第10期 2013.12 電字版

樂 偉平 夏曾佑、張元濟與商務印書館的小説因縁拾遺 《繡像小説》創辦前後張元濟致夏曾佑信札八封 『中国現代文學研究叢刊』2014年第1期(總第174期) 2014.1.15

俞 子林 我与范泉先生 『出版史料叢刊』2014年第1輯(新總第49期) 2014.3

段 懷清 『清末民初報人 小説家 海上漱石生研究』台湾・独立作家2013.11

清末小説から

倉橋幸彦 『租界上海紙巧図』好文出版2013.

4.27

陳 福康 『中国説学理論史稿(修訂本)』上海外語教育出版社2000.6

胡 孟浩 《中国説学理論史稿》序 陳福康 『中国説学理論史稿』上海外語教育出版社2000.6

趙 秀明 從《中国説学理論史稿》的出版看我

